女鑑

東京國光社

第百五十六號

女鑑第百五拾三號

目録

一柳源兵衛が妻



物質的社會

今樣の世の中は、何ぞ日に物質をのみ重んずるの甚しき。人のよしあしをいへば、先づ容貌肉體のよしあしをのみいひて、其の心のよしあしをいはず。人の美はしき汚きを問へば、やがて、其の身をつゝみたる衣服の美惡をのみいひて、心の美惡をいはず。人の品の大小をいへば、先づ住む家の大小をいひて、其の心の大小をいはず、人の高下を問へば、やがて、位階の高下をのみときて、心の高下をいはず。人の優劣を論ずれば、得分の多寡をのみいひて、心の優劣を論せず。人の尊卑をいへば、即ち、其の業の尊卑をのみいひて、心の尊卑をいはず。人の貧富を説けば、其の財寶の多少をのみ説きて、其の德の多少を説かず。甚しいかな、今樣の社會の物質を重んずる。甚しいかな、今樣の人の其の精神を重んぜざる。

されば、社會の物質は、日に盛んにして、社會の道德は日に衰ふ。道德は吾人の精神に成るものにして、物質の如何によるものにあらざればなり。

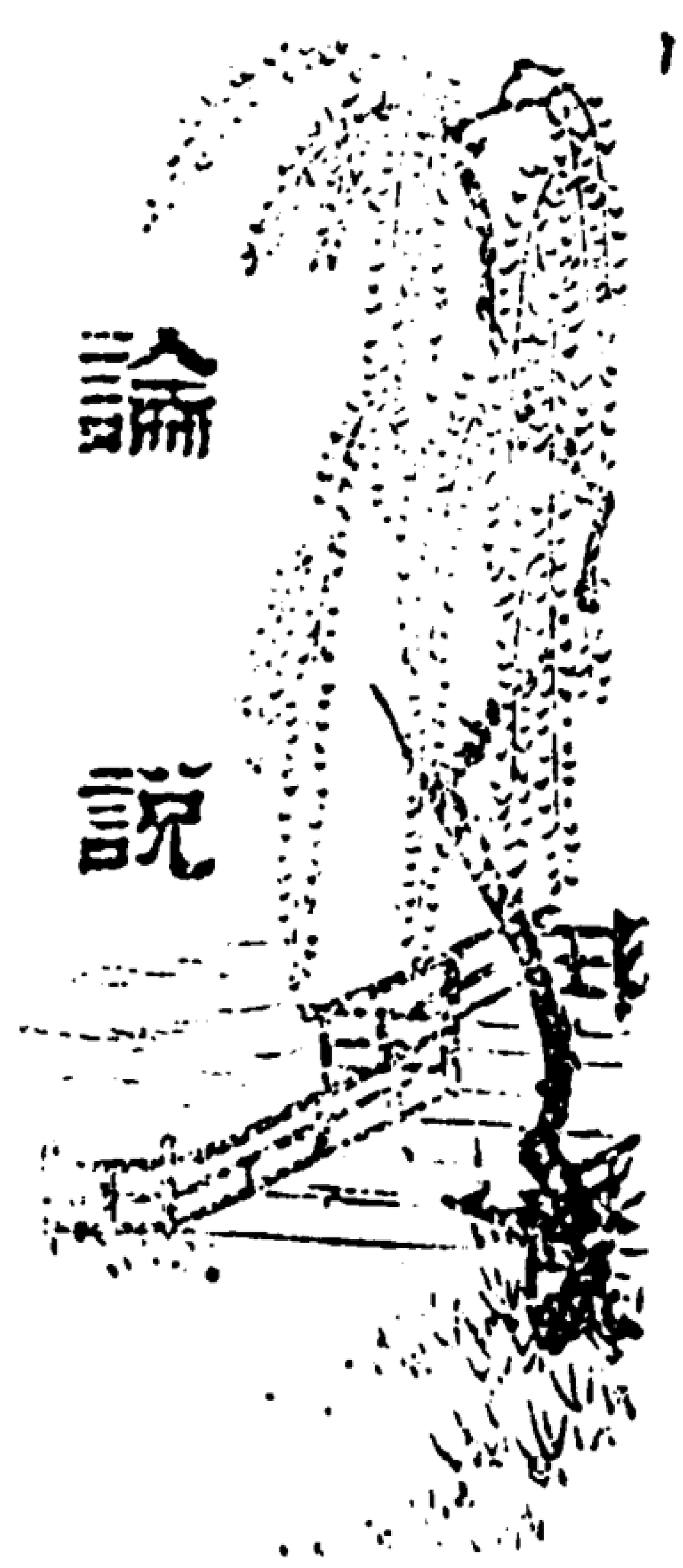
今日の社會、道德の日に非なる事は、たゞに夫婦の間の上に聞見する所の非行怪事を見るばかりにても、明に知るを得べし。さきには、其の妻女が肺の難病にかかれるをきゝて、醫藥の料を厭ひ、これに毒藥を授けて、むごくも最愛の者なるべき妻女を自盡せしめたる男あるにあらずや。これ、即ち、財寶の物質をのみ愛し、且つ、其の妻女を愛するや、單に妻女が肉體の物質をのみ愛して、精神上の愛を知らぬ男なり。されど、肉體の病めるとき、財寶の費ると知りて、今は愛情の殘る所もなく、遂に情なくも、斯く自ら命じて妻女を自盡せしめたるなり。

また、此の頃きけば、敎への親、養ひの親たる恩人の家女を外にし、其の家をも外にして、我が好きたる賤き女と共に住みたる養子ありといふ。これも、もとは、其の家女の病めるが故なりといふ。同じく物質の愛のみより知らざればなり。或は其の學資の乏しきが爲めに、よき家の養子と成り。其の家の資金を仰ぎて、恩

ふがまゝに高等の學事を卒り、而かも、巨額の費用をさへ惜まず惠まれて、遠く泰西に遊學をさへに得て、業を遂げ、名聲を擔ひて歸へり來るや、其の限りもあらぬ大恩ある養家の家女の容貌美ならざるを厭ひて、不義不德の限りにも、これを捨てゝ、別に他の好きたる妻女を娶りたる者あり。これに似たる類、まゝ吾人が聞きたる所なり。斯の如きは、すべて物質の愛のみにして、精神上の愛なき者のみ。

また、近き統計によれば、此の一月の間に屆け出でたる離婚の數、東京市内のみにて、百四十六人を數へたりといふ。其の事情は、さまぐ\なるべけれども、とにかくに、男女相婚するに、精神上より出でず、物質的にして、夫婦の間の愛情、また精神的ならずして、物質的なればなり。若し夫婦の間の愛情ににして、誠に精神よりの愛あらむには、よしやいかならむよしあらむとも、一度定めたる夫婦の愛を、さばかり容易く思ひ捨てゝ、今更に離れ去るべき振舞は、決して爲す能はざる事なり。否、決してあるべからざる事なり。さるを、物質の愛のみににし

て、精神上の愛なきが故よ、かゝるのみ。くちをしくも恥かしき今様の世の物質的社會ならずや。



論説

内地雜居に對する日本婦人の心得　藤塚熊太郎寄稿

曾て條約改正の論、上下の人心を震蕩せしめたるの時に方りては、海内人士の間に、一時勃然として、國民的精神を振起せよとの説大に行はれ、此熱炎は、活溌なる勢もて教育社會に傳播し、國民的元氣、國家的觀念、と、慷慨淋漓敵愾の氣を以て充溢したりき。特に彼の日清の大戰克捷以來は一層甚しく、所謂、勝つて兜の緒を締めよてふ語は、日本國民の間に行はれ、當路亦教育を以て戰后に於ける三大經營の一に加へ、就中女子教育の如きは、恰かも大河の決するが如き勢を以て進み、高等女學校の新設を

見るもの頗る多く、女子大學校の設立をさへ主唱するものあるに至れり。時の形勢は實に斯くの如く、暗々默々の裡に進捗し來り、都は言ふに及ばず、天さかるてふ陸奥の盡所に至るまで、女子教育の隆昌を來し、是れまでは學校に入學さすることを厭ひ居りし海士が子、樵夫が娘に至るまで、日々學校に通學するもの漸やく多きに至りたるは、誠に女子教育の爲に双手を擧げて慶すべきことなりと雖、然も、其實一部分に止りて、果して國民の大半が、其子女をして教育を受けしめつゝあるやを深く觀察せぜ、決して未だ慶賀するに足らざるべし。否、寧、悲しむべきものあり。蓋、方今米價騰貴し、諸式亦從つて高價を保ち、金融は必迫し、加ふるに東北地方の寒國などにありては、冬期業務全く絶え、貧民の窮狀は言ふにしのびざる有樣にて、食ふに糧なく、衣るに服なく、哀れを他人に訴へ、現に我酒田の如き地にありても、本間家より日々救助の粥を得て、僅かに其日の口糊をなし居るもの五百名に下らず。是れ等の狀態は、實に教育が充分の發達をなす能はざる大なる原因にして、人情誰しも、自家子弟教育を怠たるを好まずと雖も、彼等貧民は、思ひ乍らも家計上の爲めに、知らず識らず、人生最も大切なる教育を疎外に置くもの、比々然らざるはなし。特に、近來到る所に機業場の設けあり。或は養蠶業の爲めに工女となり、未だ纖弱なる女子をして苛

酷の勞働に從事せしむる等、且つ彼等工女の風儀は大に廢弛し、教育を疎外し、身體の發育を害し、其弊害實に言ふに忍びざるものありて存す。彼等貧家の女兒は、斯くの如く未だ學校に入らざる前に當りて、他に雇役せらるゝを以て、空しく其期を經過し、遂に文字書く術を知らず、書を讀むこと能はず、可惜一生を、哀れ果敢なくも不快の間に送らざる可からざるの不幸に陷いるもの、擧げて數ふるに遑あらず。女鑑の愛讀者諸子は、深窓の中に人となり、玉の席に坐し、飽食暖衣し、勉學することを得るを以て、敢て彼等貧家の子女が、境遇の斯くまで哀れなるを知らざるもの多きを信ず。諸子よ、諸子は、聊か彼等可憐なる女子の爲めに同情の涙を濺げ、余輩は、共に彼等の爲めに良策を講究して、以て女子教育の普及完成を期し、内地雜居の曉に於て、我が同胞姉妹が、赤髯奴の嘲笑を免んとするに切なり。

尚雜居に對して、日本婦人の心得べきこと多けれども、爰には其の要點を陳述す可し。尤も此事に關しては、朝野の學者論客は固より、女鑑記者及び貴女達の常々論究し居らるゝ所にして、予が今更ら事新らしく喋々すに及ばざることなれども、今や期既に迫れり、憂心忡々禁ずる能はざるものあるを以て、爰に貴紙を籍りて、敢て清耳を汚さんとす。

内地雜居も、愈々來る明治三十二年七月より實施さるゝこととなれり。其時より以後は、外國人は日本國内に入込み、日本人同樣に住居することを得るなり。我國民は、彼等外國人と軒を並べて生活し、壁を隣つて住居せざる可からず。之れ實に開國未曾有の事にして、我國民が充分なる覺悟を以て當らざるを得ざる大事なりとす。而して、内地雜居を論ずるもの、多くは國法上、經濟上等に走りて、敎育上、風俗上に論及したるもの甚だ少なきを知る。豈に遺憾に堪ゆ可けんや。抑我日本の國體を案ずるに、全く外國と異なり、天壤無窮に傳へ給ふ萬世一系の天皇を戴き奉り。建國二千五百有余年、未だ曾て外國の爲めに侵略されしことなく、所謂朝日に匂ふ山櫻花てふ日本魂は、巍然として卓立し、優に四方に誇るに足る。若、夫、今の時に當り、外國人が續々我國に入込み來りなむ、彼等は果して如何なる事を爲す可きぞ。思ふに彼等は常に呑噬爭奪を專らとし、往々宗敎の力を籍りて侵略政策を執り、知らず知らずの間に一種言ふ可からざる秘策を廻らし、以て國土を侵略するもの實に多きに居る。顧るに我國外敎の渡來して已に幾數年、耶蘇會堂の如き點々として散在し、信徒又漸やく多く、布敎の方法至らざるなし、勢の猖獗なること殆んと測り知る可からざるものあり。而して其結果として甚だ忌はしき醜聞は、頻々吾人の耳を劈き來る、或は某校の典式

を行ふに際し、畏れ多くも、御影を拜せざるものあれど、國祭日に休業せざる學校もあり。斯くの如きは、忠良なる臣民の想像だも及ばざる所、今日尚、且然り、若、夫内地雜居の後に至り、外敎益々渡來して信徒愈々多きに至らば、或は一層甚しき醜事を演ずるもの無きを保す可からず。斯の如きは、小事なるが如くにして、決して小事にあらず。國體に大なる關係を有し、國家の盛衰消長に影響を及ばすもの、決して鮮少にあらざるなり。一朝内地開放の曉に至らば、果して奈何なる可き、信敎の自由は今日我憲法の確保する所、外敎と雖も妄りに拒む能はず。然らば、即ち已に今日より斯くの如く盛なる外敎は、更らに一層の力を逞ふし、汪然として益々振ふ可きものあらんか。此時に至りて、我固有の民心を繫ぎ、我忠良なる俗を護るもの果して何人かある。之れ固より日本國民一般の宜しく覺悟す可きことに相違なきも、しかも家庭の半面を掌り居る婦人諸子の所存、最も堅固ならざる可からざるなり。尚、言語上、社交上、雜婚上、學術上等、有らゆる事物に影響を受くるもの甚だ多し。此等の要點に就きては、及ばずながら、追々諸子と共に講究する所あるべし。願はくば、將來良妻賢母となりて、家庭の半面を掌る可き重且大なる責務を双肩に擔ひつゝある令孃淑女達は、宜しく今日に於て、力を根底に養ひ、身を修め、學を勵げみ、業を習ひ、德を

完ふし、世界中の日本女子として恥かしからざるの識量を備へ、彼等外邦人をして、日本婦人の眞價を知らしめ、日本婦人の侮蔑すべからざるを知らしめ給へかし。

女德のしをり（二）

三輪田眞佐子

實に道德の淵源は、生れながら人に存する天性にあり。若しこの天性なからんには、道德なるものは說くを得べからず。故に、おのれは、人の是非を認識し、美醜を判別する天賦の良心を以て、その由來となすなり。

されど、怪むべし。人悉く良心あるべきに、往々邪惡を營むものあるは。おもふに邪惡の發端は、人の欲望にあり、良心なきがためにあらず。

蓋、欲望も亦人の天性にして、これなきものはあらじ。寧ろその欲望こそ、人をして進取の活氣を起さしむる原因動力となり、これが良心と相待ち、始めて人生を全うするに足るべけれ。見よ、人の身を處し、親を安んじ、子を愛し、將た朋友親戚の幸福を願ふなどは、悉く欲望にして、これを滿足せしめんために、各寒さ暑さの厭ひなく勤勞するならん。彼の遁世者は、欲望を放棄するものなれども、肌をかくさんとて、なほ葛の衣麻の衾などを求め、命をつながんとて、なほ野のつむな峯の木の實などを

あさる欲望はあるものゝ如し。若絶えてかゝる欲望だになからんには、片時も生存すべからず。

凡そ物は、平均と調和を以て成立し、權衡を失ふと極端に流るゝとによりて破壞せらるゝものぞかし。たとへば、涓々と流るゝ溪谷の水は、旅客の足をとゞめてむすばしむることもあらんに、一朝洪水と變せんには、その災害恐るべきが如し。實に欲望も法外に馳するときは、人を殺し身をも亡ばすに至るべし。故に、われは、人生の存在に必要なる欲望を好欲と名づけて、これを奬勵せん。詩に曰く、愷悌之君子求福不回。と、これに反して、社會に害毒を流す欲望を惡欲と稱して、これを排除せん。古より、聖賢が私欲として斥けしは、この惡望に外ならざるべし。

元來良心は、心の主宰となりて、好欲と惡欲とを分別して、好きを撰び惡きを捨てんとつとむるも、人の品別に從ひ、良心に强弱あるを以て、惡欲を制する能はざるものあらん。亦外部の境遇により、惡欲のみ養成せられて、遂には良心を抑ゆるに至るものもあらん。韓退之が、原性に於て、人の性を上中下の三品となしけるは、良心の强弱につきて說きしに外ならじ。朱子が、人の性を、本然の性と氣質の性とに區別せしも、一は良心の本體を言ひ、他は欲望の强弱を述べしものと見るを得んか。

既に良心ある以上は、これを益發達せしめざるべからず。若し欲望が好き道に增進せずして、惡き方に變化せんとの恐れあれど、これを削除すべきなり。さながら、園丁が、あだなる枝葉を摘みて、美なる花實を結ばしむるに等し。おのれは、恒に天然を愛して、これを典と仰ぐも、あだなる枝葉を以て天然の惠と思はず、唯、美なる花實こそ、天然の賜なれと信ずるなり。無より有を生ぜずとは、天地の原則とかや。故に、園丁の花實を美ならしむるは、天工に代るものなり。決して、人爲と言ふべからず。聖賢の道德を說きて、人を善に導くも、亦天然の敎に代ると言ふも可ならん。

人の身體は、相當なる程度までは發育すべき性質なれども、生るゝより能く保育せざれば、成長する能はざるが如く、道德も敎訓せざるときは、完全の發達をなす能はざるに至るべし。世人稍もすれば、人の性善なれば、敎戒せざるも惡に染まざるかと疑ふものあれども、身體の養育を加へざれば、成長せざるのみかは、死亡するを見て惑を解くべし。況して、人は身心共に完備するまでは、少くも二十の星霜を要すべければ、その間、つねに敎育を怠るべからず。



山本正周

宗子内親王

宗子内親王は、嵯峨天皇の皇女にまします。御さが貞操にましまし丶のみならず、やんごとなき御身の上を以て、節儉を守らせ給ひ、御調度などは、つねに質素を旨としたまひしといふ。身の程をも顧みずして、唯衣服のあてやかなるをのみ好める世の女童たち、此の御行を聞かで、如何にかは感ずる。

皇后班子

光孝天皇の皇后班子と申し丶は、仲野親王の御女にして、宇多天皇の御生母なり。はじめ、小松宮にませし頃に、自ら市に出で丶、物を買ひたまひしことありけるが、後尊き御身とならせ給ひて後も、毎日張を宮中に繞らして、物を買ふ狀などをなしたまひしとかや。昔を忘れたまはぬ御心の程、げに感じ奉るに餘あり。いさ丶か富貴榮華の身ぞなれば、忽、昔の貧苦を忘れて、誇りがほすする婦女等、このありがたき話を

聞かせ、恥らひて、行をも改めん。

御息所幸子

崇光院の御息所、源幸子は、初め經子といひ、贈左大臣經有の女にして、後花園天皇の御生母なり。嘗てのたまひけるやう、なべて世の人は、我が好む所は、實に過ぎ、好まざる所は、實に及ばざる道理を察せざるべからず。今に至るまで、婦女たるもの、節操を守るは、いと難きことにて、男子の口舌に蕩されて、みさをを破るもの多けれど、こはいまだ心の定まらぬが故なり。骨碎け、肉破るとも、變らじとの心さへあらば、身を終るまで、節操を保つに、何の難きことやある。とのたまへり。此の言を聞きてだに、其の御行察するに餘あり。

一柳源兵衛が妻

塩井福子

一飯の惠も、いさぎよきときは、大丈夫終身忘れざるべく、千金の恩も、いたづらにほこりては、中々に土塊たるのみ。此處にむかし、一柳源兵衛と云ふ侍ありけり。一朝、役にて、江戸に赴く事ありけるが、家もと清貧、任に赴くべき路費もなくて、困じけるを、その親族に、余吾彌一兵衛と云ふものありて、いさゝか富めりしかば、之

に費をかし與へて、やうやくに支度もとゝのひ、さて、日ならず旅立んとす。此處に、日來、源兵衞と心よかる友、中江玄齋といふもの、之を送らんため、源兵衞及び余吾、其の他日來の知己、及び散樂師中村市之進といふものさへ招ぎて、送別の盃盛んにめぐらし、今や酣になりけるに、よろしく揚柳の詩を賦し、はやく役を終へて來歸の疾きを祝すべきを、余吾、もといさゝかの事を恩に着するの小人、此の行の費を貸せしほこり心、醉と共につのりきてや、人々が祝ふ盃、己れ高くのみほして、一柳にうちすゑ、さやうに高くな受け給ひぞ、汝が此の役に趣かるゝは、乃公の力にはあらずやとの高言、人々思はず一柳が面を見るばかりなるを、源兵衞が心には如何むかりてつしけん、怒りをのみて、盃清め、いざり出でゝ余吾にさし返し、實に乃公が洪恩、報い奉るに言葉なし、たゞ之を以て答へ申さんのみとて、腰なる一刀、拔くよと見るほどに、余吾が額をうちたれば、みなぎるちしほに落花狼籍、余吾れどろきて、佩刀拔かんとせしが、早も腦亂、魂魄鞘をはなれずして、まづ仆れたり。一柳はしづかに余吾が刀を引き、人に向ひて云ひけらく、彼れが刀を拔かざる前に之を斃すは不可なりとて、我れと我が肩をきずつけ、かくて、彼れも我れも二つながら道を得たりとて、從容刀をぬぐひ、己が席へ就き、散樂の師を顧み、乞ふ君をわづらはさ

ん、君我が家に行きて、わが妻にありしよしを告げ、自刃せんと欲すれど、裝束を治め渡すやう傳へ給へとあれど、中村血氣の若者、其の場を立つを欲せず、願くば他人をと云へど、一柳が强ひての請ひに、是非なく承諾し、盛久とて、古の武人の事を演ぶる散樂をとなへ、やがて一柳が門を叩きけるに、妻女、燭火をかゝげて直ちに出で迎ふるに、中村、事のよしを語りぬ。妻女はさわぎたるけしきもなく、從容形をあらため、良人今日の事、士人の行に愧づる事は侍らざりしかを問ふ、中村あつぱれなるよしを答へしに、さては、何事か託する所のあらざるかを問ふ。中村、自刃裝束を致せとの依賴ありて來るよしを告けれど、妻女即ち室に入り、裝束をあらため、中村に渡し、終始自若として亂れたる色なく、あつく其の勞を謝しければ、中村、また盛久を唱へて中江方に還りぬ。

一柳乃ち狀を具し、官に訴へ、裝をとゝのへ、官吏の來るをまちて腹かき切りたり。時實に貞享元年八月の事なり。あはれ、原兵衞が此行爲、忍耐にとぼしとは云へ、氣慨ある士人の心のまたやる方もなき事にて、つゝしむべきは長舌、人を害し、己を殺すの器とは知るべし。

さて、妻女は夫を失ひ、たつきなき身のせんすべなく、親里へ歸りて、父母の膝下に

またかしづくもかなしきに、子に迷ふ親は、そゞろにかなしがり、まだ花の色もうつらず、子さへなきを、いたづらに寡居させんは不憫なりとて、再縁を求めてすゝめけれど、妻女はあるまじき事とて、聞きも入れざるを。親は中々に思ひたえられず、如何にもして、何處へか再び嫁せしめんものとて、親族とはかり、娘には告げずして、ひそかに婚儀をとゝのへ、さて、結納の日となり、始めて此の事を語り、何事も親の意にまかせて安堵させよかしとの言の葉を辭むもはや約とゝのひし曉なれど、娘は今は中々に爭はず、何事もよろしきやうにとあるに、父母をはじめ人々もよろこびて、結納の仕度とゝのふるもいそしう、更に何事にも心付かず、にぎはひさやぎぬるに、娘は已が室に入りしまゝ久しうなるも出で來らず、人々、やゝあやしみてその室を伺ひしに、こは、そも、妻女は赤き心を血にあらはして仆れ居りけるに、人々、大におどろき、さやぎたつれど、玉の緒のたえて、もはや返らざるに、父母はいたく悲しみて、せめては其の志を遂げしめんとて、夫の墓になきがらを埋めけりとぞ。妻女姓は奥氏、年はやう／＼廿七歳、まだ秋風も吹かなくに、桐葉もろくもちりたるぞあはれなる。

此處に、一女ありて、毎晨必ず來り、墓を淸め、香花をたむけ、經を唱ふる事凡そ廿年、たゞ一日の如くなるに、人、その誰なるかを尋ねけるに、之は、婦人が、夫の家に

ありし頃、仕へたる侍婢なるよし。誠や、上、義を尊べば、下、おのづから化すと云ひけるが、一柳の氣概、奥氏の純貞ありて、此處にまた此の婢の信實ありとやいはまし。

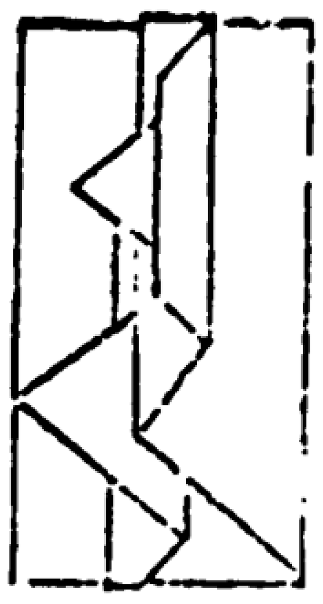
家政



折形

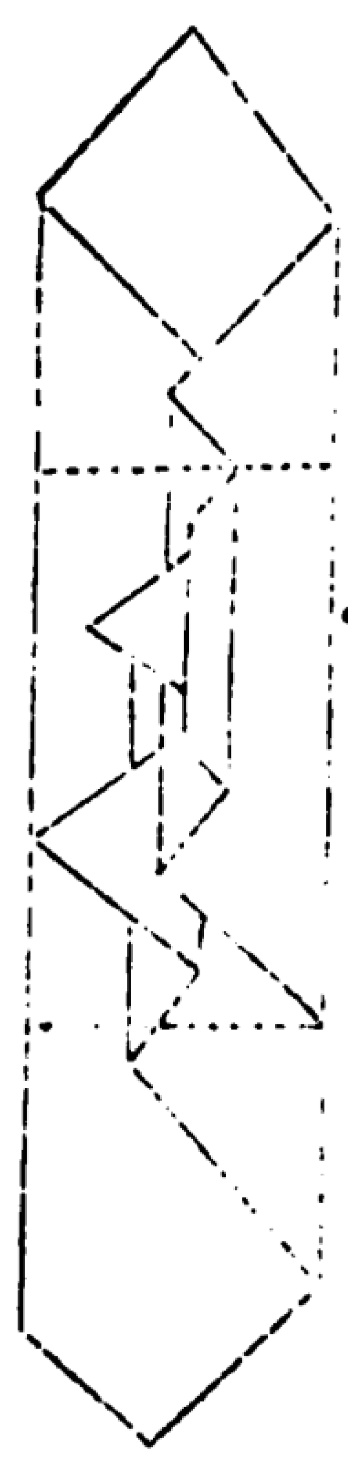
有住齋

かね筆包

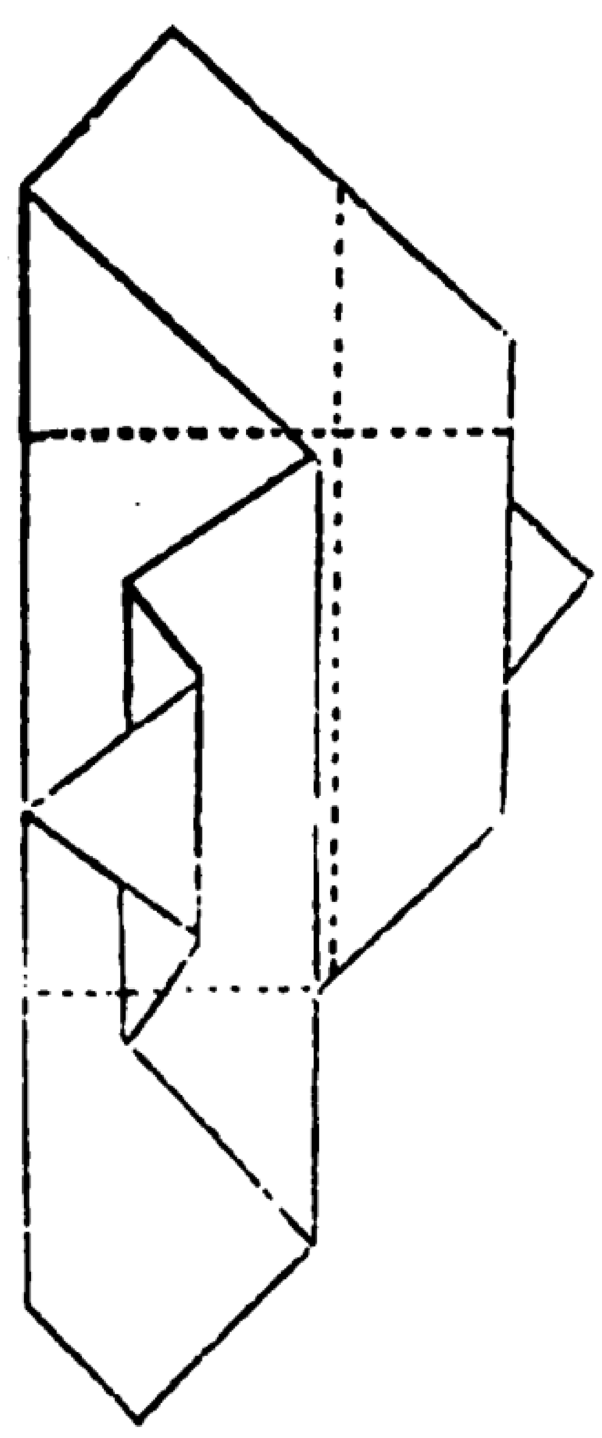


三鳥揃とて、雉子、鶴、鴛鴦の三鳥にすることあり。

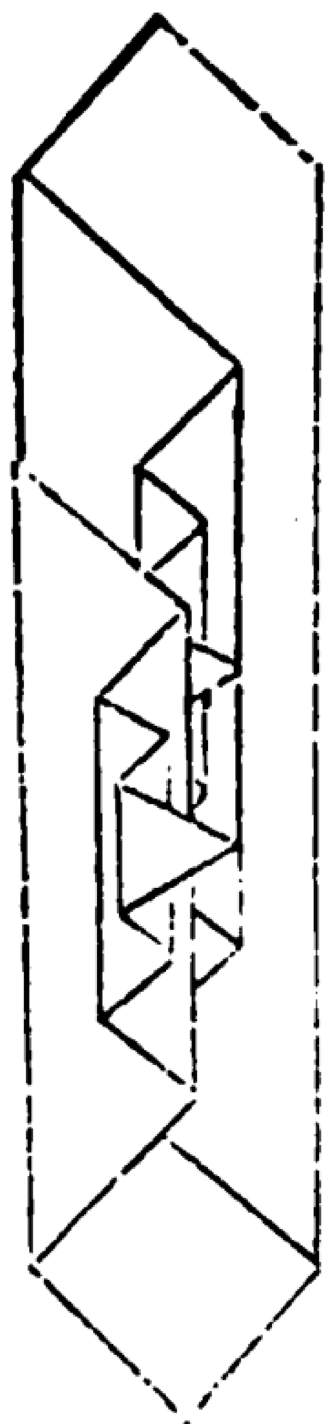
全じく解の一　上下の折り反を開きたる處。



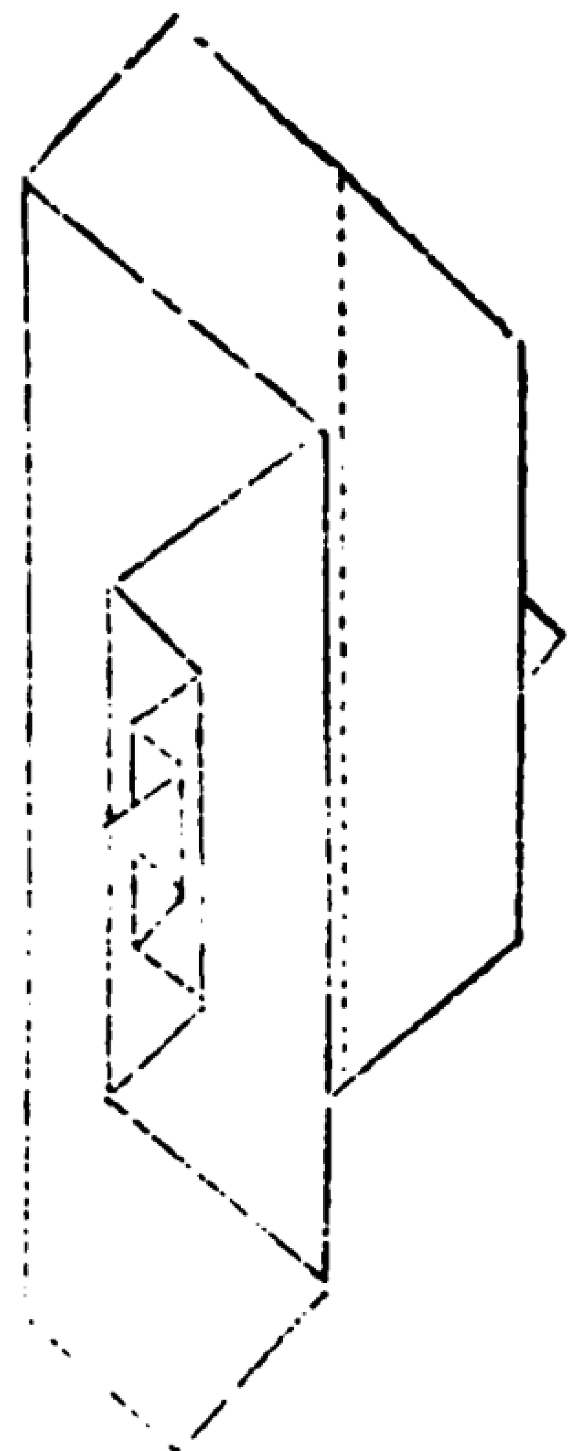
全じく解の二　上下と右とを開きたり。



涅液子包



れなしく解の圖　右を開きたる處。



茶の湯

孤峯庵篠仙齋　關　韋雄

茶道客方心得草

先づ何方にてもあれ、釜日、或は往掛りにて釜掛り居たらむ、（但釜日と云は、所謂茶道の稽古日にて、茶友を招待し、又不招も定日を聞傳へ往て各手前、及古實を研究し、茶談を示語し、互に知識を交換するものなり。先づ、挨拶前に淨水を遣ふべし。是則千利休居士の訓七個條に、手水の事専ら心頭を嗽ぐを以て此道の要とす。と、心頭は精神を喇ぎて、以て俗塵を脱し、煩腦を去讁し、良心を潔くせよ。との教也。此水の遣ひ樣に習あり。第一に袂の手拭を出し置、蹲居して、手水鉢にかけある柄杓の向振りを能見置、右手にて取、水を汲、左の手に掛けて手の掌をくばめ、水をたゝへ、柄杓を水の中へ入置、右手と左手と能揉合せ、又右手にて柄杓を取、水を汲み左手に掛、倘手の掌を窪めて水をたゝへ、口中を喇ぐべし。一遍ぐぶ〳〵をしてはき、今一遍水を含みて又はき出すべし。次に水を汲み、柄杓を逆にして水をたらし、柄の我持たる處を洗ふべし。而后、元置有りし通りに置べし（但何人遣ひても、亭主の置付たるに不違樣にするが古實なり、次に、手拭にて手を拭ひ、口の廻りをも拭ふべし。其手拭は、袂に納め、次に席上床の前に至り、床に向ひて座し、扇

子を拔、膝の右側に置、兩手を突、床の掛物に對し一禮すべし(但此時宜は、何の爲と云ことを質議するに、一會の茶の湯にあらずとも、苟くも床に掛る軸物は、禪語詩歌連誹に至る迄、高位貴顯、或は銘筆の名高く聽へ、繪なれば、狩野家、土佐家、和漢の別なく、江湖に有名なる人の墨痕を床に掛けて、賓客を接對するの禮なれば、其厚志に酬ゆるの意也)故に客も亭主の心切を能感じ、第一に紙中を見、名印を見、表具は一文字の切地、中廻し、上下軸と、能註目すべし。次に、床の上にもせよ、柱に掛あるにもせよ、生花を見るべし。生方の形容、木草の分別時々の正花、色の取合。生方の巧拙長短、花挿の品柄、薄板迄も能々深切に見終り、一禮すべし。次に、扇を差立て、爐にもせよ、風爐にもせよ、釜の前に至り、兩手を突、先づ釜を見るべし。(但し是にも習有之、第一に釜の形、鉉付、口作り、蓋、と見て、次に、爐壇、炉緣、と見るべし。風炉も、釜の見方に差違なし。風爐は、釜の次に、灰作り方、土器の淺深、風爐の形、小板の品柄、又、棚物、臺子類、飾あらば是をも見るべし。又、床の掛物、茶入、生花、風爐、釜、棚物、都て飾物類、何にても不知の有る時は亭主へ質問して、詳細に熟知すべし、是を聞にも、口頭にて、御掛物は何人、釜の作は誰と云て尋ぬべし、徒に見、指差て、あれは何抔云ては野鄙にて宜しからず。東山義政公は、能問、能見よ、是を不指。と垂敎せられたり。遵奉せずんばあるべかず。都て拜見し、次に席中の定座に着座すべし。相客あらば、謙遜辭讓の上着すべし。次に亭主に對し挨拶をなすべし。其時々の季候、或は家族の安否をも懇に尋ぬべし、右畢りて、前條に

賜したる軸物、其他の類を、徐に虚飾に流れざる樣誠實に賞歎の有無を程度に合せ申述ぶべし。亭主は縦ひ客方賞賛の辭を呈するも、左樣にも無之抔と卑下すべし。(且此邊萬事は實際に付ざれど、容易に敎盡しがたし、又、實際現場にても、其人修業練磨の上にあらざれど、師たる人、何程傳達に喋々喃々すとも、實効を奏さゞものなり。倘、良好の師に付て其蘊奥を學び給ふべし)　(以下次號)

女禮

禮節敎授　有住常子

免状授受の樣(立禮)

まづ立たる時の禮のさまは、

授くる人、免状の字頭を上にして、竪にして、中ほどを、大指と、四ッの指にてそつと持をり。

うくる人は、進み出で、正面になりて、下座にて、兩手を、膝の頭までおろして、立禮をなし、左足よりすゝみて、三尺程手前に至り、立止り、又、兩手を、膝頭の下までおろして、禮をなすべし。さて、右左と、二足すすみて、授けたまふを、兩手にて、しづかに、頭をすこしうつぶせたるさまにして、うけて、右足、左足と、わきに引て、いたゞきて、右の足を、右の方に少しひらき、筋違にして、次に左の足をも、引てそろへ、筋違に立て、なほ頭はすこしうつぶしたるべし。右の手にてもち、左の手の大指を、向の方より、上の重のなかにいれて、中までずらして、しかと持て、右の手にて、上重をとりて、右に開き、左の手にて、殘りたる重をひらきて、謹て、見て、しづかに、たゝみて、右の手にて持て、懐中して、

正面になりて、又一禮をなして、右足、左足と、あとに引て、次に、右足を、左足のあとの方に、横ざまにつけて、次に、左足を、右足の先に、竪ざまにつけて、踏そろへて、左足より、あゆみて立かへるべし。

同（座禮）

授くる人の持ちたるさまは、右におなじかるべし。うくる人、しき居そとまで進みて、左足を、右足より、半足ひきて、左膝より、跪き、右膝をも跪き、右手を、右膝頭につけて、右膝をすこしあとにひきながら踵を平になし、左膝をもかくして、すわりて、両手をすゝめてゐやをなすべし。さて、頭をもたげて、両手を、すゝめ、三度にて、しきゐうちに入さまになすなり。かくして進み入て、しかと躰を正して、右膝を、膝頭をのみうかして、右にひらき、ますぐに立て、（此さまは既にも出たるを見るべし）進みゆきて、三尺ほどの所にいたりて、例の如くすわりて、一禮をなし、両手をたゝみにおろし、すゝみ出て、授けたまふをうくべし。さて、うけて、おしいたゞき、右の方へすこしむきて、立禮の如くなして、拝見して、懐中して、ますぐにむきなほりて、つゝしみて、禮をなして、両手をひきて、例の如くつまだてゝ、たちて、右にめぐりて退くべし。

たちぬひ

西山たい子

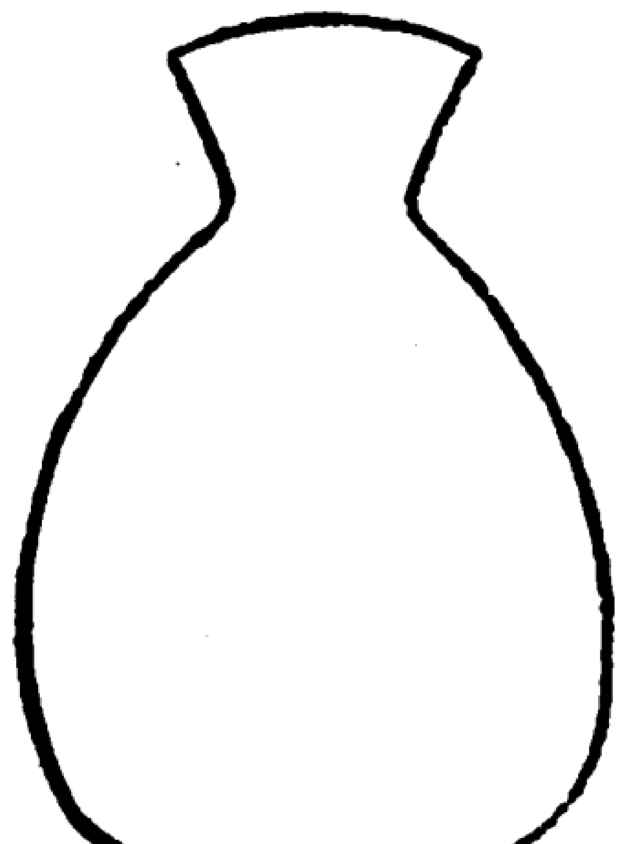
（八十六）福袋

此の袋、一名を寳袋とも云ひて、此の袋をもたらた

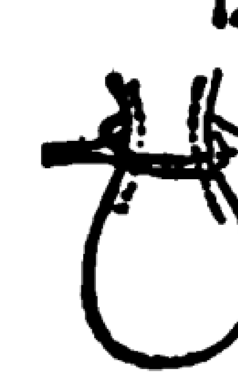
には、常に、銀、黄金みち〳〵て、おだかな恵比壽、大黒天の如く、金錢に不自由を覺えぬと云ふいとめでたき袋なり。

まづ、此の頃、はやる、ゴールとか、きぬ天とか、或は只の天鵞絨にても、何にても、なるべく、うすからぬ、堅からぬ切れを表とし、裏は、やはらかき皮にても、金巾にても、よろしきを、表裏同じやうに、左の圖の如く裁つべし。但、表裏とも、二個を要す、大小は心のまゝにすべし。

その圖

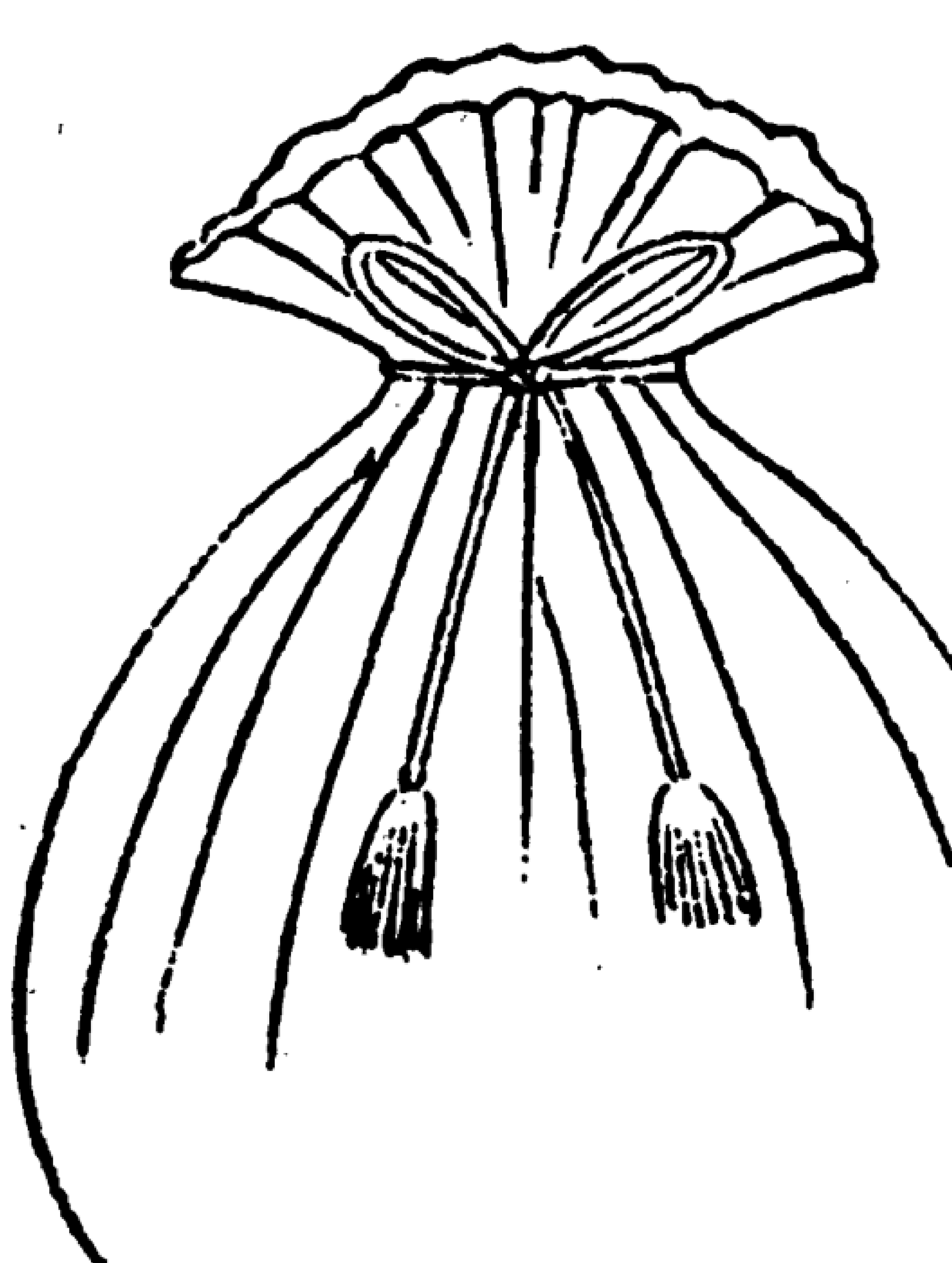


さて、裁ち終らば、まづ八寸ばかりの紐を二つだけ作りおきて、表を兩側合せ、少しく凹みたる處に、紐を兩方よりはさみ入れて、



上圖の如く兩側を中頃まで縫ひ、裏も表の如く縫ひ、口を表裏合せぬひ、ひきかへし、少しく表の方を裏にかへし、さて、底の方を裏より四つ合せてぬふべし。しかして、紐を兩方より引きしめて結ぶときは、他の袋にまさりて、しめく〳〵りよきものなり。必竟、福袋と云ひけるも其の閉づるに利ある所よりいでたる所謂にや。

ぬひ上りの圖



造花

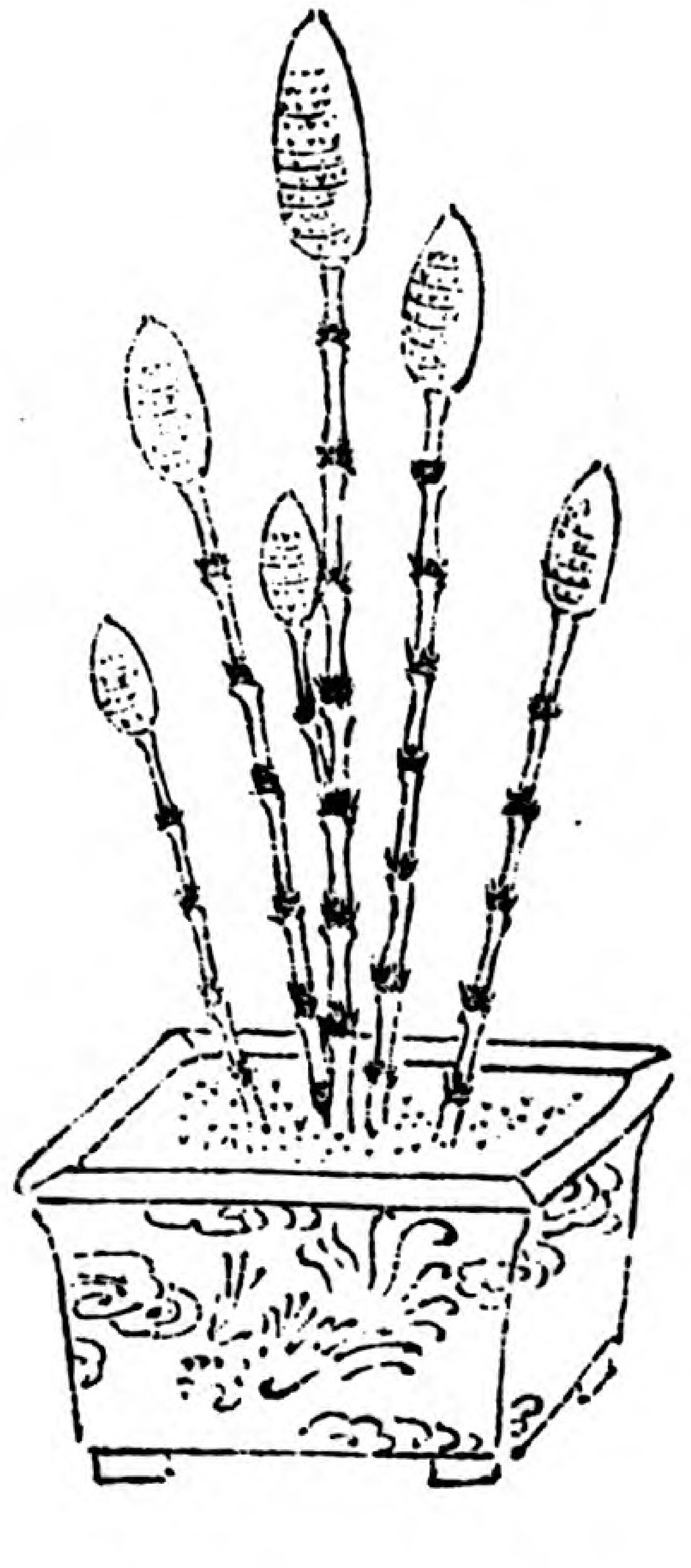
伏見藤三郎

土筆

先づ線金に、綿を土筆の形に巻きつけ、薄糊にて上を固め、乾して后頭の太き處に壓糊を付けて、之を栗の内に挿し入れて栗粒を着け、手にて能く壓へ、后鏝をやきて其上を少しく燒き、莖は薄美濃紙の礬水引にて巻き「マセンダ」にて薄赤味を帶びしめ、別に又美濃紙を幅四分許にたち、先を鋸の歯の如く切り込み、之を茶粉にて薄茶色に染め、鋸歯の處を墨にて模糊し、后鏝にて横に引きて細かき筋を入れ、之を莖の一節毎に一回りづゝ巻きつくべし。是に大小數本を造りて、或は簪、或は鉢植となす。

鉢に植うるには、苔の代りに、元に青海苔を散布すべし。

第百二十四圖



だいどころ

一錦糸鯛

此魚は、十月より翌年の三月迄を季節とす。てり燒、鹽燒、又は椀だね等に用ひて宜し。

一黄鯛

黄鯛は、夏季を季節とす。あらひ、鹽燒、椀だね、ま

たゝ「バタ」を塗り、胡椒少しをふりかけ、蒸燒にするも、美味なり。

一女鯛

女鯛は、秋より翌年の春邊を季節とす。刺身、てり燒、椀だね、等に用ふるなり。

一寒鯛

寒鯛は、寒中を季節とし、さしみ、椀だねに用ふるなり。

一いぼ鯛

六月より十月頃迄を季節とす。てり燒、鹽燒、椀だね、すしだね等に用ふ。

一子生鯛

子生鯛は、夏季を季節とし、あらひ、さしみに用ふべし。

一鳴鯛

是は夏季に限り、あらひに用ふるをよしとす。

一ぶ鯛

此魚も夏季に限り、あらひに用ふべし。

一金目鯛

此魚は、一月より四月迄を季節とす。さしみ、煮肴に用ひて宜し。

一萬棒鯛

此魚は、下等の魚なれ共、一月末より四月頃迄を季節とす。さしみ、てり燒等に用ひて宜し。





學園

秀歌集（十八）

壇井正男

○

植ゑおきし二葉の松はありながら

君が千歳のなきぞ悲しき。

○これは、後撰集の二十の巻なる哀傷歌の部にあり。紀の貫之が、藤原兼輔朝臣の亡くなりて後、土佐の國よりまかりのぼりて、兼輔が粟田の家にてそれを、悲しみよめるなり。○二葉の松、やう／＼芽生ゑせるばかりの松をいふ。僅に萌ゑ出でゝ、二葉ばかりに開きたる意なり。すでに、草の芽生へしたるばかりを二葉といふなり。○君が千歳。貴方の長き命といふを、上に松をいへるよりて、それによせて、千歳といへるなり。松は久しく枯れぬものにて、千歳も縁なるものにいへるなり。○一首の意は、植ゑおきたる松の芽生ゑは、いよ／＼生ひ立ちて、今も枯れもせずにかくながらへてありながら、さて、それを植ゑおかれたる貴方の長命なくして、既に亡くなりたまへるが誠に悲しいと、亡き人の宿なる松を見て、そゞろに人を惜しみ泣きたる歌なり、松によせて君が千歳といひたるあたりの詞づかひも面白く一首何となう身にしみてやさしくおぼゆるさまなり。

○

君まさで年は經ぬれど故郷に

つきせぬものは涙なりけり

○これも、同じ所に並びたる歌にて、貫之が、亡き兼輔の家にて、前の歌などよみたる時に、其の家なる人が、仝じく惜しむ心をよめるなり○君さまで。君とは兼輔をさせるなり。○年は經ぬれど。幾年をも過ぎたれどもといふこと也。○故郷。こは、もと、兼輔が住みたるを、今は其の人亡くなりて、あらずなれる故に、故鄕といへるなり。○涙なりけり。亡き兼輔を惜しむ涙をいふ。

○一首の意は、君はあらずして、既に幾年の年月をも過ぎたれども、何時までも亡き君の戀ひしさ惜しさは忘れ難く、君の昔は住みたまひける此の宿につきないものは君を惜しみて泣く涙であるワイといへるにて、これも、何となう身にしむ歌がらにこそ。やさしき情を歌ひたれどならむ。

○

悲しさは慰むべくもあらざりき
　夢のうちにも夢と見しかど

○これも、仝集の仝所にあり。こは、保明親王の薨せられし時、乳母なりける大輔、いたく戀ひかなしみて、思ひ入りて寐たる夜の夢に、親王の見ゑたまひけれど、かくと玄上朝臣女（大鏡には他の御息所なる如し）にいひつかはしけれど、その人の許より、「時の間も慰めつらむ覺めぬまは（大鏡には此の第三句は君はさはとあり）夢にだに見ぬ我ぞ悲しき」といひおこせければ、大輔が、その反へしによめる歌なり。○此の歌は後撰集と大鏡とやゝ異る所あれど、大鏡の方よろしき調なれど、其方に從ひつ。

○一首の意は、夢にあひたらど、僅の時間なりとも、少しは心を慰めたらむと仰せらるれど、決し

て、我が戀ひ悲しむ心は慰むたよりもありませなんだ。如何となれど、夢の中にても、眞と思ひならむには少しは慰むかたもありしならむが、私は、夢の中にてもやはり、現に見るとは夢みず、夢に見て居るなりと思うて夢みたる事ゆゑ、少しも慰むべき方は御座いませんでしたといへるなり。夢の中にも夢と見つれどの意象誠に面白しといふべし

○

なき人の共にしかへる年ならば
　　暮れゆく今日は嬉しからまし

○これも、全集全部にあり。藤原兼輔朝臣が、其の妻のみまかりての年のしはすのつごもりの日、貫之と共に、妻がありつる昔の事など語りて、よめるなり。○亡き人の。亡き妻がといふ意なり。○共にしかへる。亡き妻が共に歸へり來るといふことにて、しは共にといふ語勢を助けむ爲に、下におきたる助詞なり、意義はあらず。○嬉しからまし。嬉しからむ、といふことなり。

○一首の意は、明日はまた、新しき年のかへり來る事なるが、若し亡き妻が共に歸へり來る事ならむには、今年の暮れゆく今日の日も、惜しくはあらずして、誠に嬉しい事ならむといふ意にて、年のかへるといふによりて、亡き妻も共に歸へるならむと幼げにいへる、なか〳〵に深情溢れて、あはれなり。

○

菅原やふし見の暮に見わたせば
　　霞にまがふをはつせの山

○これは、全集の十七の卷の雜歌の部にありて、讀人は知れず、伏見の里にて見わたしたる景をよ

めるなり。○菅原や。菅原のといふ意にて、且つ、○やは感動をこめたる詞づかひなり。菅原は大和の地名なり。○ふし見の暮れに。伏見の里の夕暮れにといふことなり。○霞にまがふ。まがふといふは、かゝる時には、誠は其の物ならぬ物が、よく其の物に似て明かに容易く區別しがたくなるをいふ。故にこゝにては、夕ぐれに見わたす山のけしきが、さながら霞に似て、やがて霞に紛れて見ゆるなり。○をはつせの山。大和にあり、初瀬山なり。

○一首の意は、菅原の伏見の里の夕暮に、遠く見わたせる初瀬山わたりの山べが、ほのかに霞の靡くが如くに成りて見ゆるといふ面白き景色なり。景氣見るやうに浮びて、誠に詩の美をあらはしたる歌といふべし。

ふゞくろ入添

下田義天類評論

原文縣居翁の作

○第十六

此の一篇も、本居宣長翁へ與へられたる手簡なり。本書は、今猶松坂本居家に所藏せり。

正月廿二日之御示捧讀、爾來も、村田與兵衛之便に、御平安と承り歡喜いたし候ふ。小子御尋忝御事に候ふ。別條これなく候へ共、近年疝癪にて歩行自由ならず。春來山野之逸興も稀にて遺恨也。其の上、去冬以來甚多事にて、いまに諸方之事かたづきかね候間に、萬葉清書も閑をぬすみ候事故寸暇なく候ふ。萬葉は先三卷と、其の別記を書下し候ふ。先、判にと存じ候ふ。次は寛々命にまかせ申す可く候ふ。然は、早春御祝意として御状且方金御投祝受

いたし候ふ。其の御答申候ふ。其の内屆ぬらむと存じ候ふ。

○萬葉九之御問よき御考もこれ有り候ふ。委しく傍書に記し返進し候ふ。

○御詠御見せ、猶後世意をはなれ給はぬ事これ有り候ふ。一首之理は皆聞え侍れど、風體と氣象とを得給はぬなり。猶御考候ひて、御詠し御見せ下さる可く候ふ。

これ鈴屋翁の弱點也。翁の詠歌は、畢生この境界を脫却する事能はざりしにや。翁の御詠に對して、我々の今彼是と評し奉らむことは、頗憚多きに似たれど、人は一身を以ちて萬能に達し得可きものにあらず。詠歌は鈴屋翁の長所にあらざるなり。されど、生來この道を好ませ給ひ、また廣く其の筋の書をも獵涉し給ひしからに、さすがに平凡の作者にてはおはしまさず。その艶に優しきさまを詠ませ給へる中には、おのづから一種の風骨ありて世人をして欣慕れくこと能はざらしむるものも亦少からず。慥にこの道の先達たる品位は具備し給へる御方なり。翁の歌は拙劣なり。翁の歌は無趣味なりなど、無遠慮に口きたなくいひのゝしる人々には、輕々しく同意を表し難し。然はあれども、其の風體と氣象との二つは、縣居翁の御覽し咎めさせ給へるごとく、鈴屋翁の得玉はざりし所なるべし。一代吟詠の御歌を通覽するに、風體は兎も角も、氣象といふ一事に至りては、殆絕無の姿なり。蓋、氣象は、其の人に存じて學習すること能はざるものなればにや。

今この風體といふことゝ、氣象といふことにつきて卑見を附加し、以ちて讀者の參考に供すべし。

風體といふ語は、いと古くより歌の姿を評せし語なり。清輔の奧儀抄、基俊の悅目抄、順德院の八雲御抄、範兼の童蒙抄等にも、あまた所この名稱あり。また、俊成には、古來風體抄の作あり。定家には、正風體抄の著あり。以ちてその來る所の久しきを察すべし。さて、風體とは如何なることを意味せる語かといふに、詠歌大概抄（細川幽齋の抄に）左のごとくいへり。よみて以ちて其の儀を明らむべし。云はく、

これより風體のことをいふなり。前に心と云ひ詞と云ひ其の外別の事有るべしとも覺えぬに、風躰と云ふはいかなることを云ふ、それは是を人に取りて申さば、見め容より始めて、さまかゝり衣裝にいたるまでの心なり。人たるものゝ心用ゐの然るべく、詞つきの然るべきも、ふりかゝりの惡きは其の人の心も見れとさるゝ物なり。されば、風躰は第一とも申したき義なり。云々

是をまたこまかに人の上にたとへて申すべきならば、人の容顏、目も鼻も口も一つ一つは能くて、押たてのわろき人もあり。是が人の上にての風躰の十分ならぬなり。是を又、目は目のあるべき所にあり。鼻は鼻の在るべき所に有りてこそ然るべきを、當世の風躰は、ちとめづらしく、耳を鼻に取りかへ、目のある可き所に口をつけなどして面白がるやうなり。これ、風躰の外道なり。これは、人の面躰の事、但得風躰とさし當て申すべきならば、人に取りては起居ふるまひの義なり。同じ衣裝をも、事柄やさしく着なしぬれば、やさしく見ゆ、むざと着なせば、其の姿まで比興になりて、其の心中も推量らるゝものなり。云々、

といへり。風躰といふ事はこれにて明なるべし。さて、その風體を得ると得ざるとのさかひは、いかなる所にあるべきかといふに、このことは、一朝一夕には盡し難けれども、これも、定家卿の詠歌大概に、其の標準をたてゝ、左のごとく云へり。一讀せむ思ひ半にすぐるものあるべし。いはく、

風躰可レ習二堪能先達之秀歌一不レ論二古今遠近一見二宜歌一可レ習二其躰一

といへり。これ、二條家風躰の標準なり。これにて其の意は能く聞えたれども、初學の人々の爲に、彼の細川幽齋の抄をもてこゝに附記して參考に供すべし。幽齋は、この定家卿の敎訓を釋して左のごとくいへり。いはく、こゝに堪能先達之秀歌といへるは、所謂堪能の先達ならぬにも、自然秀歌を詠み出だす事はあれども、それは本とするにたらず。いきあたりものなり。又堪能の先達なれどもとて、毎度秀歌有る可きにあらず。故に、堪能の先達の秀歌にならへといへるなり。云々、

こゝを三重にかゝれたり。先堪能と云ふは、其の道にたへたる者なり。其の道に能々至りて器用と達者とを相兼ねたるの堪能なり。先達と云ふにて又一重上をいふ也。器用と達者とを兼ねたる人にも道の傳受の淺くして、習口傳のなき人あり。これは、全先達には非ず。さるによりて、堪能なれども先達ならぬ人あり。先達なれども堪能ならぬ人もきはめて有ることなり。此の二つを相兼ねたるを云ふなり。さて、又、秀歌に習ふべしといへるにて又一重たてたり。堪能にて、しかも先達なる人、其の時に取りて、歌のよまれず、いでこぬ事あり。さるほどに手本と見習ふべきには、堪能に

て先達なる人の其の中にも秀逸の歌を眼にかけて習へとなり。云々

といへり。かゝる標準を立てゝ、その標準にかなへる歌を、風體を得たるものとし、その標準に叶はざる歌を、風體を得ざるものとはいふ也。縣居翁の標準ともいふべきは、彼の新採百首の體なるべし。鈴の屋翁は、其の風體を得ざりしなり。さて、又、氣象といふことは、一首の活氣なり。幅あり奥行ありて、生々たる活動の氣骨あるをいふなり。女子の歌には、女子の氣象あるべく、男子の歌には男子の氣象あるべし。こゝにいへる縣居翁の氣象といふは、ともに、雄壯活潑なる日本男兒の氣象を差したるものなり。鈴屋翁は、生得穩和篤實の御方なりしからに、おのづから、その詠歌にも、穩和篤實なる氣象を備へたる所はあれども、縣居翁の所謂氣象といふことに至りては、一體にその氣風の乏しかりしものゝ如し。所謂猛得の逸馬に跨り、風雲を叱咤し、雷霆を驅使するごとき悲壯凜烈の風は、この翁の短所なり。これ、わが國歌の本體に非ざるが故に、その優柔温雅なる風を壓へて、雄壯活潑なる姿に誘引せむと努められたるものなるべし。これ、この垂訓ありし所以なり。

〇文之事最前作られ候ふを、いろ〳〵御見せ、一覽し候ふ。源氏體を御好み候ふとの事、似たる詞などは多く候へども、是も前文之氣格ひくゝ聞ゆ。源氏之文は心高く清らに書きし物なり。すべて、後世の物語文を擬よといふには侍らず候へども、其の物語文を師として學べぞ、それが奴となりて、彼の文に似たりと思へど、實に似ざるもの也。たとひ、彼の

文を作り給ふとも、先古文を得て後かへり見給へ。其の筆意など明らかに見ゆべし。おのれ、はた、若き時は、古今序以下をのみ思ひつるを、今かへりみるに、皆よろしからざりき。古文を作りて後みづから知る事なれど、今其の文の評などは申し侍らぬなり。さて皇朝の文、今京以後の人は皆女體となりぬ。それをのみ見なれぬれど雄々しき語出來がたし。神代記の天照大御神のすさのをの命にむかひ給ふ時の文など讀み見給へ。其の外、古事記、日本紀に多し。又式の祝詞をよく見給へ、祝詞は神事故に神の事あるのみ、かれをもて他事をも書くべきなり。又女にむかひなどしては、艶にも書く可き事なれど、艶なるにも古體あるべし。又、はしの言葉して歌を詠み給へ。はしの言葉は、まづは古今集の書きさまよし。歌と相てらして、互に略しなど、いとこと少くて聞ゆる樣に書くをよしとす。すべて、後撰以後のはしの詞はつたなし。されど、伊勢物語こそ詞は古をまねびたれ。土佐日記などもよし。源氏はけしきを書きたるぞいと〳〵よき、それも彼の詞をたゞちに書く可からず。たゞおもむきをとるのみ。

○おのれが歌よからねど、御望なれど少し書きてまゐる。文、長歌なども侍れど、いとまなくて得書かず。

○注せし物、此の度よき便なれど見せまゐるべきを、折ふし皆外へかしなどして有合侍らず。其の山田に畑井理兵衞といふ人あり。これはいろ〳〵寫し取りつ。此の度一封遣し候まゝ、御屆候て御借り候へかし。いせ物語の注の事いひ遣し候ふ。但此の人の宿所忘れたり。本大内人なるが。久保倉大夫の手代を今勤むといへり。依りて久保倉方にて御尋候

はゝ、彼の家になるか。又私宅にも居り候ふべし。諸事御意を得度きを、これもやうやくに認め候ふ也。

三月十五日　　　縣主

本居兄

彼の畑井、年々東へ下る也。早春に歸りしが、夏中に下候はむといひき、右之事仰遣はされ候はむならむ、早くいひ遣はされ候へ。

語意遣はすべく、先頃より再考いたし候ふを、清書の助筆なく、此度も延引に及候ふ。近來出來次第遣はすべく候ふ。

(別紙)　名所月といふ事を人のよむを

ぬむ玉の夜は更けぬらししもとゆふ
かつらぎ山に月かたぶきぬ

高瀬川をわたる

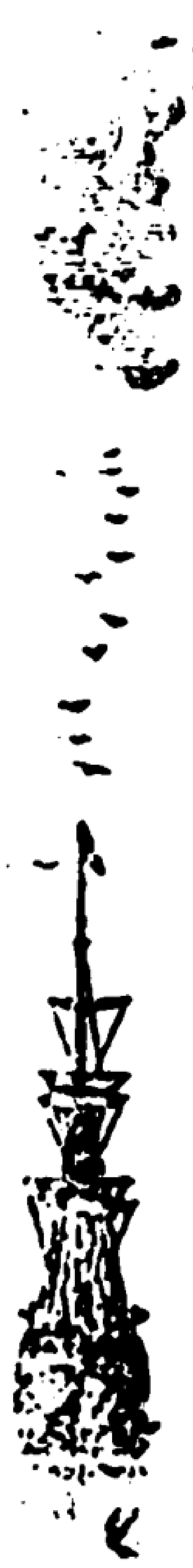
高瀬川みとの川風寒けれど
旅にしあれどあさ川わたる

木綿山

をとめらがはなりの髪をゆふ山の
ひたひに白くふれる雪かも

此のほか猶多かれど、先かくのみ、

此の三首は、詠歌の摸範として鈴の屋翁へ與へられしものなるべし。三首ともに、げに長高くすなほにて、日本男兒の歌として恥ぢざる趣あり、たゝ、高瀬川の作は、首中に川といふ語を三つまでぬきたる、すこしうるさきこゝちせり。風體にのみ心とられて顧みるにいとまなかりしにや。





眞龍院君御道の記（つゞき）

金子みどり寄贈

九日　けふの山越いかならんと、兼れもひはひしに空いとくまなく晴渡り、秋の日長閑なれぞ、うれしく、辰の刻に宿りを出で、碓氷の山にかゝりて、

出る日の光と共に分登る
　碓氷の山の道そはるけき

からうじて、山の半ば入りて、はね岩と言ふに休らひ、四方の眺實靈なり、猶越行に、谷水に心地よげなる車のかゝりたるを見て、

世の中の水を心の水車
　めくりわひ見る旅も珍らし

左頃澤といふ所にて、

たく深き岩尾つたひにさ頃澤の
　水の流や清くすむらん

堀切坂、長坂てふ立越て、二王堂、熊野權現の社を通りてふし拜み峠にいたりぬ。

上野やこゝぞ信濃の境なる
　碓氷の峠越えぞわづらふ

行人も駒の蹄もつかれけん
　われのみやすく越る山路に

碓氷山上

吹笛山路峽。石窟似蛇蟠。目下無雲意。
層巒石壁難。

輕井澤にまでし休らひて、

皆人の深き情にかくぞかり

やすくこえてしけふの山路

こしかたや東の人に告まほし
吹笛の峠やすくこえしと

猶たどり〳〵行に、山巌峨々として、かたへは谷深し、四方の山端遠近に見ゆ、所々山田の原なるに、千種の花の咲きみだれたるも一際の眺めなり。追分に晝の休らひして。猶末遠き旅衣立かさぬ行程に、淺間山近くなりぬ。裾野の眺望いはむかたなし若きもおとな人も打興じつゝ、富士、淺間、裾野いづれとりまさりなかるらんなどいひあつかうま

いづれとも思ひわかねど淺間より
ふじの裾野にしくものぞなき

馬瀬口に休らひ、曠野に出れどあまた牛を放ちかふいと珍らかにおもほえて、

總角が野飼の牛の引つなも
とらて幾つれ遊ぶ豊けさ

小諸の城下にいたるの道、松の並木いとことなり、ゆゑありて唐松林とやらん言よし、折節夕月の影さやかなるに、

立つゝく松の木の間の月影に
たそかれてゆくたびの衣手

古郷や東の空に見し影も
かわらぬ月ぞたびの友なる

今日の山道いと遙なれど、からうじて酉の刻に、小室の宿りに着侍りぬ。

十日　今朝は雨雲立まとひぬれど、立出ぬべしとぞゝのかされて、卯の半に宿りを出でき、村々山田の原を行に、四方の見渡しえもいはれず。

朝まだき雲にそびえて峯つゝき

向ふ外山の彌高きかげ

西が原より布引山を見て、

いつの世に天津少女のさらし劔
跡さへなかき布引の山

猶行まゝに、あまた松の立並ぶを見て、

峯幾重かさなる山の麓まで
みどりにつゞくまつの村立

田中に暫し打休らひつゝ、野路山路たどり行に、詠めいとたぐひなし。

秋の田の靡く穗なみに松坂の
緑をそへてむかふをちこち

海野に休らひして猶山道を行に、はるかそなたに、夫かとぞかり姨捨山の見ゆれぞ、

頃も秋の半なりけり名にたかき
姨捨山の月や見まほし

上田驛に暫し休らひけるに、雨ふり出でければ、いとういそぎ出ぬるに、險しき山坂なれば道をたどり〱して、心細くれもはねて、

さらぬだにやつるゝ袖をぬらせとや
雨降くらす旅ぞものうき

鼠宿に立休らひ行程に、申の刻に榊の驛に着きぬ。暮行まゝに雨いとう降まされば、更に東の方戀しく何くれと語らひ、夜も闌に成ぬれば、假枕に寄添ひて、

名殘なほつきぬ東に心のみ
かけてぞ通ふ夢のうき橋

十一日　夜ふかく枕をそばたてゝ打聞に、猶をやみなき雨の音に、けふの山道いかゞならんとおもひ佗しに、東雲の頃より降りやみぬ。明渡る空を詠むるに、朝日はのめくもられしと、卯の半過る頃

宿りを立出でたどり行に、山路なれどいと滑かにて見るも忍びがたくおもふものから、

おとゝもの雨の名殘にかち人の
道ふみしだき行なやむらん

横吹のけはしき道にかゝれど、いと心細くて、

やつれ行旅の衣の朝しめり
日影まつてふ横吹のみち

雨の名殘りにや、朝霧深かりしに、

越來にし山路ひとつに霧籠て
野邊に麓もそこと知られぬ

下戸倉など打休らひ行まゝに、空も晴渡り、秋の日のくまなきに、姨捨山間近く、田毎の影も見ゆれど

名は四方に移る毎田の月の影
實に見まほしき姨捨のやま
繪かくともいかに及ばん更科や
姨捨山の秋のながめは

矢代に中休らひして立出行ど、名に流れたる筑摩川船渡し、河端に例のいかめしき武具立ならべ船よそひするもいときらびやかに見ゆ、

旅衣舟てそりして打出る
千曲川原のなみぞ靜けき

兼ておもひしにも似ず風さへ靜なれど、うれしく船より上り行程に、左右山野の眺望類ひなく、いひ出すべき言の葉もなけれど、

信濃路や分行末も野邊山邊
河瀬につゝく四方の見渡し

南原村丹波島などにしばし休らひて、犀川も舟にて越し、幾村里を過て、申の半に善光寺に宿りせしむ。

十二日　晴、卯の半に宿りを立出で、如來堂にまうづれど、いとゝたふとくおもはれて

此世より善き光りぞと嬉しくも
猶後かけてたのむ御ほとけ

けふしも爰にめぐりきにける事のかしこきに、ふりにし跡さへ何くれと思ひの珠の數くりて、たゞし念誦しつゝ、猶かなたこなたふし拜み、此所をも立出でゝあら町などいふに休らひ行程に、左に松杉生茂りたる山見ゆ是なん風こしの峯と聞て、

松高きみどりを添て風こしの
峯の梢や紅葉しつらん

吉村邊より山道遙に分過て、

村つゞき麓の坂をこゑ佗て
行方もしらぬけふのやまみち

室飯に晝の休らひして、猶たどり行つゝ左の方を仰ぎ見れぞ、飯繩、黑姫、明光、みつの峯並ぶ、實に名にしれふ高山仰ぎ見るに、山のかひより戸隱山も見ゆ、

明らけき光りをそへて黑姫や
飯繩のひまにむかふ遠近

など打たはれ休らひつゝ行程に、けふや金府江府の中道とれもへぞ、いと心細くて、

住すてし跡の名殘を思出の
袖に露そふ旅の中みち

こゝかしこ打詠め行程に、申の刻拍原の驛に着きぬ

（未完）

北の海路

石榑千亦

第七信

十三日九時頃、清水警部は、馬をひきて來れり。會長はじめ相率ゐて、祝津にものせむとてなり。われ

と後藤氏とは、やゝれくれて出立つ。小樽の町をはづるれど、やがて山なり。其道のけはしさに、馬車にかくべき馬に、乘鞍おきたることゝて、汗にまみれし肩、見るもいぶせく、頸のあたり、綱にてか長柄にてかすれて、赤き肉を出せる、乘るもあはれなるばかりなるに、況してわれは少き時、一たびをみなへしにはあらで、落ちにしことあり。それより乘らで過しゝことゝて、何となく危ふかりしに、それは思ひしほどにもあらで、たゞ、前まぬなむ心うき極なる。いでやとて、坂路にさし出たる木の枝折とりて策にかへ、今はあはれみし心もうせて、うちにうちけれど、四五歩駈くるまねして、又うなだれ徐々とゆく。かくなりては、腹に鐙をあつれどとて、甲斐あるべくもあらず。中々に乘りて來ざらましかばと思へど、何のせむもなし。柔よく剛を制すなど、誰がいひはじめしことぞと腹立し。たゞをかしきは、馬車の後につきたる時は、おもひのほかにかくることに候。

心はやれど馬すゝまざるに、とう〳〵と音して、ふりいでたる雨は、時の間に天の河原の堤もきれたらむが如く、立髮をしぬぎ、帽子より頭よりしたゝりて、軒の雫の如く、外套に傳ふ。まして岩多き坂路をくだるに、足のふみどの危さ、何ともいはれたるものに是なく候。

瘦馬にうは荷うつといふらむ如く、峠に道二筋あり。とふべき人はなし。右すべきか左すべきかとしどしたゆたひしかど、思ひきりて右にとりつるは、大の大のあやまりにて、高島といふ處にいで、又一層遠くなり、道もきはめてあしく、苦しみを重ね候。漸くにして二の峠をこえ、祝津に向ひたる折は、雨は

れたるに、跡のあともなければ、いぶかしみつゝ駐在所についてきけど未だ誰も見まつらずといふに、さてはわが高島に迷ひ入りつるほどに、雨のため引かへし給ひしなンめり。さはいへこゝまで來つるをたゞに歸らむもくちをしとて、手綱かいくりて、日和山燈台に登り、高がやしげれるところに、馬はなして見わたせばせが、迷ひ入りし里もしろう見えうまやの山に小樽の里はかくれたれど、なほはての家一二見え、海をへだてゝ、石狩の方の山はるかに見わたさるゝなど、えもいはずをかし。崖の下は大きなる岩、おもふまゝに擴がりをり。汽船帆船のうかべる、多からずとはいへ、中々の見物に候。

やゝ少時して、里の方を、二頭の馬はこなたを向ひて來れり。さてはわれより後にましけりと見るまに會長は淸水警部に導かれて、のぼり來ませり。きけばうまやの山を見て、しばし雨やどりし給ひしなりとのこと。

燈台に入りて看守にあひ、見張のことくさ〴〵と談ひをき、白鳥永作とて、この里の總代の家にしばしいこひ、ひるげなどあるじせられて、歸途につきたるにしばし、休みしゆゑか、馬のあがきもはやく、平らかなる道は、一たび策さへあつればよくかけて、思ひしよりは早く歸りつきぬ。東京をいでゝよりの運動にて、身體のはたらききはめてよろしく、夕餐ことに味わるやうにおぼえ候。

こゝになほ一ついひたきは、祝津の里の漁業のことに候。こゝはにしんの產地にて、そのいづる額夥しく、ために土地も富みたり。昨年より百石千貳百圓にもなりて、收入少なからぬによるとか。ましてこの頃帆立貝をとりて、外國に輸出する道ひらけ、

細民は大いにうるほひ、一人だにこまりゐるものはなきやうになりたる由。そは一日漁にいづれど、一日拾圓ばかりの幸あり。少なくとも、五圓には下らざれなりとか。肉ははまぐりの柱の如く、きはめて風味よろしく、殼もよきは杓子になし、さらぬも粉として、肥料に用ゐらるゝよしに候。又これまですてたりしにしんの煮汁も、今は最よき肥料として用ゐらるゝよし。このわたりの畠には肥料を用ゐずたゞ魚を干すために地味肥えて、畑つ物は自られひたつなりとぞ。其肥料としての効力いかばかりなるかは知るに余あるべく、かゝれど其汁には、水または他の物を合はさでは、あまりつよきにすぐるとか申候。かゝる樣なれど、海より入る財は、未來盡くる期なかるべし。あはれ、まことに海は、富の無盡藏とも申すべきか。されどこの富を得るには、幾たびか波のためにうきめを見るのみか、船も命も失ふこと夥しからむ。それにつけても、安全にいでらるべき難波船救助の道の、一日も早く、行わたらむことを、望むほかもこれなく候。十三日夜。

僻陬雜觀　　紫光

（一）樵夫樵婦

有明の月は西の空に淋しく殘りて、霜をおびたる風身をきるばかりなる午前三時ごろより、荷車の音は霜ふかき道に高くひゞきて絶間なし。これは樵夫樵婦の山に入るとて曉起していそぐなり。車もたぬもあり。

やはらかき衾につゝまれて、あたゝかき閨にありてだに、曉の風は身にしむを、その身のなりはひの爲

とはいひながら、人はうまゐの最中なるを、蓐食してゆく短衣の袖、いかで寒からざらむ。然も、かく早くいづるは、もと、日毎に一日幾錢といふ料をいだして、其の元締より鑑札を得て山に入ることをうる定なれど、つとめて、一日の中に多くの薪をいだし得むことをのぞめどなり。その山の一里二里の遠くにあるはまして、

繼ぎさしたる手袋やうのものに凍ゆる手を凌ぎて車をひきゆく夫、おなじ姿して頭を手拭にてつゝみたる婦の、幼子を背におひたる、さては十四五ばかりの男女どもひきつゝき相交りてゆくが、その談らひゆくをきゝては、實にあはれれはふかきぞかし。扨は、何事もかたらはで、鼻うちかみつゝすぐるも殊におぼゆるなり。

夕ぐれ、日影すでに西にかくれて、薄暗きほど、塒あらそふ鴉の聲とともに、薪つみたる車、薪おひたる人々などは、山より下り來暮靄たなびきわたる石徑をわたりくるさまなどの見ゆる、げに詩中の趣ともおもはるれど、今日一日をいかにいたづけるにかなどゝの心にてりては、歌の中のおもしろき姿にとりなさむも流石になむ。

婦どもは家にかへりては、その夫などの薪などそれ〴〵とりかたづくる隙に、夕食の用意などするなるべし。かくて、麁朶うちくべたる爐のほとりにまとゐして、一合の晩酌を傾けて、陶然たる夫のかたはらに一家親しく夕飯したゝむる程、一日のつかれも忘られて、和氣は猶かゝるわたりにも雍々たるなり。

(二)炭竈の烟

あたゝかき火桶に炭さしそへてながめやる神路山の高峯には、朝に夕にたゆることなく、炭竈の烟の山

おろしになびくが見ゆ。二處ぞかり見ゆるが、ことしは秋の始より焼きそめて、冬の半すぎても未やまず、あはれ霜ふかき晨はいかに、風さゆる夕はいかに、雨の日雪の夜など、小屋にある人やいかならむ。

闌奢の薫たきこめて
冬あたゝかき姫君の
閨に侍らふ桐火桶
さき匂ふなり櫻炭

炭焼く翁のいたづきは
唯富人の爲にして
こほる霜夜に夜もすがら
身は破小屋にふるへつゝ

才くらべ（十九）

蓬生屋女史

清少納言の頓才

小一條の大將師忠公の御住居、小白河と云ふ所に、上達部けちゑんの八かうし給ふに、いみじうめでたき事にて、世の中の人のあつまりゆきてきゝぬるに、少納言も之を聞かんとて、おそからん車はよるべきもなければ、露と共におき出でゝゆきたり。頃しも六月の十日、夏虫さへなほ薬草のつゆかれて光りも出でぬ眞ひるとき、稠人の中にもまるゝくるしさ、ゑ堪へぬに、けふ必ずし果すべき用事さへおきてきつるなれど、たゞ少し聞きて歸らんとしつれど、しきなみにつどひたる車は雲霞の如くにて、出べきひまも見ゑぬに、如何にもして出なんと思ひ、前なる車にせうぞこすれど、後車はなほ近くたゝんと思ふう

れじさに、明けて出すを、人々いとかしがましきまで笑ひにくむを、清女はくるしさに、耳だもかけずせむがり出るに、權中納言よしちか卿、人〳〵の笑ひどよめく中に、やゝまかりぬるもよしとて、共に笑ひ給ふぞめでたき。こは、法華經の方便品に、釋迦如來、開三顯一の御法をとき給はんとする時五千人の增上慢の輩、法座を起て退きけるに、如來默然として敢て止め給はず、舍利弗に仰せらるゝやう、かくの如き增上慢人退くも亦よしとの給ひし事ありしとか。よしちか卿、只今それになずらへ云ひしも、げに所がらをかしきに、清女、それも耳とまらぬぞかりにまどひ出でゝ、さて、後、人して、五千人の中にはいらせ給はぬやうもあらじと聞えさせて歸へりにき。こは、あまりのあつさ、君もやがて退かり出で玉はんぞとの意にて、やゝ退かるもよしとの詔を、聞きもあへず、直ちに返し



ぬぞ淸女の才のいみじさよ。

隆賴の才

隆賴卿は世にならびなき才人にて、學頭にさへ成りたる人なりけるが、その勸學院の學生たりし頃、人々あつまりて酒宴しけるに、各議しけるやう今日の宴は年齢座次をぞ云はで、才の次第に座には着くべしと定めけるに、隆賴、直ちにすゝみて、最上座につきけるに、傍輩共、何を左右なくさはつくぞととがめけるに、隆賴申しけるやう、文選三十卷四聲の切韵暗誦のものあらむ、すみやかに隆賴ゐくたるべしと云ひたりけるに、傍輩ども皆口を閉ぢてあへて云ふ事なかりけりとぞ、かばかりの才もて、上座につく、また道理とも云ふべし。

一書生の才

むかし櫻井秋山とて、女畫師ありけるが、顔は世になく醜くけれど、丹青はまた、世になき妙なり。されど、その人いたく心ほこりして、あるとき、丹青こらしをりしが、やがて、ひとりうちながめて、世の中に我に匹敵する男子は一人もなしと云ひけるうしろに、一書生立ちをりしが、之を聞くより、君また世に匹敵する男子なきを憂ひ玉ふなかれ、君が容顔またつり合ふ人もなかるべしと云ひけるに、秋山いたく耻ぢたりしと云ふ。此の男、口にまた才をもたるものかな。

笑話（奇談一笑）

か、み、

蚤の色赤く、虱は腰にすむゆゑよし

むかし〳〵虱、蚤のもとに、消息していへらく、

拜啓突然ながら、申上候。そも〳〵隣を善くし、

災を恤むは、先哲の良模にして、弱きを挫ひ、顛を扶くるは、往聖の懿典に有之、之に順ふものは昌ね、之に逆ふものは亡び候事申すまでも無之、古今の興廢、歷々、目のわたりに見候ごとくにて、上は恐れ多くも、一天萬乘の君を始め奉り、下億兆に及ぶまで、こと〳〵くこの道によらぬものとては無之候。さて、貴下と小生とは、互に壌を連ね、界を接し、肥を分ち、甘を同うし、親しきこと、骨肉にも踰り、情は同胞よりも深く、斷金臭蘭、固に己に論なき事に御座候。さりながら、貴下は、よく天年を竟へて、甘脆の美を享有せられ、我が儕は、しだ〳〵夭折致し候て、頻に湯鑊の慘に罹り申候て、欣戚の相懸ること、霄壤も啻ならざる事に有之候。これ何が故にて候か。定めて以あることにて候べく候。そも〳〵、かの毒手一たび動き、苦爪綴に至る時、君は則、距躍三たび、逝くこと電の如く、また影の如くにて、跡もなくまた影もなく、一瞬千里、其の神速なること、譬ふるに物もなきばかりに候。然るを我が儕は則しからず。蹣跚跮踱、汗流れ、氣喘ぎ、顛るが如く、踏たる如く、分寸も移り不申澁滯なること御存じの如くに候。この故に、昔の厚情も復見る所なく、今の薄交も、以て責むべきにて候。今貴下、かく申候を聞かれ候は丶、愧ぢ候事は御座なき哉。今より後は、貴下、小生が儕を棄てられ候はず。緩急の時は、深く比隣の好を念ひ、蒼皇の際も、提契の勞を辭することなく、貴下小生を前に挽き、小生、亦、貴下を後より推し、速に肌膚の平曠を避け、深く縫隙の奥區を保ち候はんに、毒手も畏る丶に足らざるべく、苦爪も亦畏るに足るまじく候。

如此にして後、永く交誼を全うし、婚姻相賀し、死喪相恤み、子々孫々に至るまで、この好を渝へず候はゞ、これ當今の樂事、千歲の美談には候はずや。以上申述候事ども呉々も御推察の上御納得可被下候早々頓首。

蚤讀み畢りて、返書す。其の文に曰く。

拜復、辱き御諭し、誠に以て、面のあたり拜聽仕り候心地致し、深く心肝に銘し候。御高諭の段恐入候。さて熟々堪考仕り候に、かの蒼皇の際など、小生もとより、心つのざるには無之、實に力足らず候て、據もなき次第に有之候。之を譬へ候はんに、能く百里の道を走り候ものにても、僅に百斤程の物を持たせ候はんには、五十里にて、はや疲れ果て可申候。氣力限りあることに候へど、之を強ひ候ことは叶ひ申まじく候。且又、かの毒手の動き候は、暴なること風雷の如く、往來の疾く速かなることは、瞬息も其の間に入れ申まじく候。提挈推挽など被仰候ことども、思ひもかけぬ事にて、これ貴下にも益なく、また小生にも損なることにて候。さて二人ともに並び斃れ候て、笑を人に貽し候も榮曜たるわざにもこれあるまじく候ぞや。今貴下の爲に謀り候はんに、貴下常に腰間を離れず。かの手爪の纔に動くを見候はゞ、則深く褌中に潜み、稍、退かむ、復、腰間に出で、西に聲して、東に嚙み、前に沒して、後に見はれ、彼をして終夜奔命に疲れしめ候はゞ、彼、必、神困し、体倦み、眼眶屢々合ふに堪へがたく候て、終には自然捫索の意もなくなり可申候。こゝに於て、貴下、即、佚を以て勞を待ち候はんには、復、顧望畏縮の憂もなく、肥を擇ひ、甘を尋ね、屈厭

たゝ〳〵思ふがまゝなるべく候。今貴下の爲に萬全を謀り候ことこの外はあるまじく候。小生もとより愚慾に候て、時に望みて、斷ずるによしなく、嚢底の知、これに止り申候。右思ひつき候まゝ申上候。御採用被下候はゝ、幸甚の至に有之候謹言。

虱、この答書を得て、計ることに然り。とてうれしさに堪へず。海山の珍味をあつめて、蚤を請じて、饗應せり。蚤あまりに飲み醉ひて、色を變へたり。これより後、蚤の色は常に赤くして、虱は腰間に棲むなりとぞ。

まつの庵（五）

白魚女史

あづさ弓射るが如き年月は此處に早く五年、雲井の雁は幾度か玉章をかけてきつれど、徒らに田の面にれつるのみにて、此處には更に言傳もなし、さは云へ、君がくれ〳〵も殘されし御言、よしや拙き身は忘れ給ふとも、武士がかけたまひたる此の眞弓、此まゝ捨てもせさせ給ふまじ、よし、忘れも捨てもせさせ給ふとも、かりにも君が魂魄をこむると仰せし手束弓、つかのまも我れいつきゝつらでやはと、朝にちりを拂ひ、夕に床を清め、あけくれ、つゆゆるぶまなく、いつきかしづけど、其方が心はやさしけれど、數ふれど、もや六年、そよとのおとづれもなきは、都の花に心うつろひやしけん。のう松が枝、如何にまつとも甲斐なき年を過して、いたづらに谷の朽木とならんもれろかなり。忘れし人は其許も忘れて、うつろはぬ人を、のう、それもちぎりかはせしとならぞ、また是非もなからんが、さにもなきをと母なる人のすゝめに、娘は容易く首も上げやらず、よ

ゝと泣き入りしが、やゝありて涙をぬぐひ、例へ言葉はかはさず、ちぎりもし侍らずとも、必ず居つけよと與へられしあづさ弓、手にせしからは、外には引かれぬ我が心、母様ゆるし遊ばしてとたかり泣き沈めた、されど松が枝、そはまだ人をまちてもならんが、かくのみあらじとすさぶ世、人のいつはりを誠として、徒らに百年をあやまりてはと母は思ふなりとなほ云ふを、なほ辭み、たとへ、人はつらく、百年、千年、いたづらに待ちて、はては、そのゝ柄の空しく朽ち侍るとも、妾はつゆ悔ひ侍らじ、母様、どうぞ此まゝにおきて給はれかしと、ひかぬ心のあくまでも見ゆけるに、母もてはくは云はず、汝がさる心ならんには、母の心もとくゆるせし事、今よりひとつ心にまちてんのみとの言の葉に、娘は心やすう覺ゆるものゝ、またいつをと定かにちぎりしにもあらぬればつかなき行方、嗚呼あらば、今の心にむかしありなむ、あしはしたなく、ればつかなくむちぎらぬものをと、今更にあづさ弓、かへらぬ事を心にくりかへしつゝも、なほ、人のとふや〳〵と松風のはてはあらしとなりはて、軒の松虫も聲よわり行くに、松が枝たゞ心細う、なげきの杜に、時雨は絶えず、袂をしぼりけるが、はてはうき霧に迷ひふたがりて、そのまゝ一間にたれこむる遠山邊には男鹿の聲、山風に傳はりて、ねられぬ床にひゞきぬるもあはれなり。

高藤卿もとりおきし手束弓、つかの間も心にかけぬにはあらねど、其夜父の卿、雷電にそむねをとゞろかし給ひしより、玉にも黄金にもかへがたきいつくしき子、またやかゝる事に出であひ、空しく狩場のつゆとなりはてなむ、如何に呼ぶ子鳥呼ぶとも、な

くとも甲斐なかるべし、今日迄は我も好む道、とゞめもせざりしかど、此後はかゝる遊び、ゆめし給ふなどありけるに、高藤卿も御父の慈愛の身にしみて、その遊びも絶えてものし給はずなりにたれど、また少女が宿におとづるゝ便もなく、月日を送るほどに、少女が影の身をさらずなつかしけれど、よし父に語らひてとも思へど、流石にそれもはづかしう、重武にうちしめしてもと思ぼせど、それもまたうち出で難く、ひとり心をやるほどに、此君、才のいみじうすぐれたりければ、大内よりはやく殿上人にめし出され、日夜朝にのぼりて、はてはひまだになし。されど、少女を心に忍ばぬ折りはなく、すぐしくらし玉ふ事四年、五年にもなりぬるに、父なる人、年若くして、はかなくなり給ひにたるに、そがなげきにかきくれ、また一年も過しけるが、日をふるまゝに、父が面影ははなれ行きて、いとゞ淋しさにつけ、ありし少女のいよ／＼忍ばれ、遂に忍びあへず、重武を呼び、一年、鷹狩しつる折り、雨やどりしつる家を、汝は覚えてやど問ふに、如何で彼の家を忘れ候ふべき、山階は、なぎさの山のほとり、心もあつげなる主人の容貌さへ今もはな眼にうつり侍りと云ふに、汝れにさへうつる面影、我にはいとゞまさりたる少女、年ふるまゝにあやしうまさりきて、え堪えぬ思ひと仰せらるゝ、、重武おどろき、さやうなる事おはしなど、早う仰せ聞え玉へど、とくはからひ申すべかりしを、年月をつもる事もおとゝし、先きおとしゝならず、はや六年、人は如何に恨みもかこちもおはさんものを、今日、只今すぐに御伴つかまつらんとあるに、高藤卿いとゞよろこび給ひて、さらむ鷹つかうやうにてと仰する、外には、駿馬のい



なゝく聲、案内せよと仰せる事さへ思ひ出でられ、之も已れをうながす音かと、そゞろ心もはやりたち、駿馬の名、そのまゝれはせたる駿、はやくひき出せとうながしたてゝ、にはかに出でたち給ふ、頃は二月の中の十日の事なれど、前なる梅の花所々ちりて、鶯、木末に人くとはやく告ぐるもさかしな。

君は、そゞろに胸とゞろかれ給ひながら、垣根の共處ら、やり水のさまながめ亘し、手綱ゆるめしともなきに、駒はみづからはやり立ちて、ありし門にれどり入り、一聲高くいなゝけど、去年よりよわりはてゝ、玉の緒もたえ〴〵、身も糸すぢどかゝりを、やう〳〵つなぐと見えたる松が枝、にはかに耳たつれど、此間より千はやぶる神てふ神にたのみをこらしつる母親も、耳とく聞きつけ、かけ出づれど、見違ふどかりねびまさりたれど、まさしう過にし人なりけるに、夢かとぞかり、あやしきまでのうれしさに、たゞ涙先き立ちて、迎へんすべもなみにたゝずみぬれど、娘が心は如何なりけん、やがて、明日、むしろどりの車に下簾かけて、侍二人具し、親もろともに迎へとりたるぞめでたける。

（完）



文林

早春柳　　東久世通禧

春きぬと思ふやかてにうちなひく
すかたのとけき青やきのいと

山家梅　　鍋島直大

山里のかきねのうめはみやこより
かへりて色のうるはしきかな

月前歸雁　久我建通

何方にありともみえすつきかけの
かすむくもゐをかへる雁かね

春朝　高崎正風

いきたなくねすくしにけり曙の
花をけさはと思ひしものを

雨中雉　津輕承昭

朝かすみたち出て見れはすゝな畑
ふるはるさめにきゝす鳴なり

閑居春雨　長谷信成

しつかにと思ひてすめる宿なから
餘りさひしきはるのあめかな

海春雨　宮地嚴夫

わか船のはかはかすみにくれ果て
小雨ふるなりはるのうなはら

林下春雨　阪正臣

をり／＼に椿てはるゝれとはして
片山はやしあめしつかなり

遠村柳　鎌田正夫

柳はらかすむを見れはやま本の
さとにもけふは風なかりけり

浦霞　遠山英一

わかの浦もゆる芦へにゐるたつの
影もほのほのかすむはるかな

賞梅　大畑弘國

梅が香を袖にとゝめて歸りゆかん
手折るは惜しきかつしかの里

早梅　下田義天類

二つ三つくちきりそめて梅のはな
ものいひぬへくはる風のふく

月前梅　三輪義方

なつかしき薄くれなゐのしだり梅
おほろ月夜のかげにみるかな

志摩の國こふといふ處にやどりて　三湘千春

こふのはま磯もとゆすりよる波の
音を夜ひと夜きゝあかしつる

句毎に文字の餘れる歌　藤井行麿

わたつ海の沖つ潮にか合つき入て
鮑とるあまは息もつきあへす

寶皇女　佐々豊水

至徳のすめらみことはよろつよに
たゝへざらめや仰かざらめや

山春月　足立正枝

咲きにほふ花よりしらむ山の端に
かすみて殘るありあけのつき

池尼　菊池眞澄

ひくしほのひるか小島の捨小ふね
うかふや尼のなさけなるらん

故郷春草　荒波直方

我か宿のにはのわか草生ひそめて
ふるはるさめに色そ染めける

柳間黄鳥　安齋篤敬

春風にゆらくやなきのいとはへて
なくうくひすの音をや織るらん

鶯聲和琴　宇井正夫

手すさひの琴ともしらてうくひすの
音をあはせたる我がいほり哉

人に若菜を贈る　木庭芳香

ころもてに雪をはらひて君がため

ちよのわかなをつみてける哉

春色満湖上　石原均

志ら雪の消え行く春はさゝなみを
花とよせくる志賀のうらかせ

霞める空を雁かへる　近衛貞子

はる〳〵と霞こめたるれはそらに
聲をのこしてかへるかりかね

夕春雨　鍋島榮子

櫻さくはるのゆふへもはれやらぬ
雨にさひしきけふにもある哉

窓前梅　日野西廣子

鶯もたえすきてなくまとのとの
うめはさかりに成にけるなか

霞添山色　柳原愛子

うら〳〵とのはる日かけも霞つゝ
長閑に見ゆるをちの山のは

早春雪　小池道子

あまりにも暖かなりとおもひつる
空さえかへりあはゆきそふる

海邊春月　松平健子

曳網のめもはるはるとかすむなり
つくたの沖のはるの夜のつき

閑居燈　諏訪晴子

文まなぶ窓にかゝやくともしひに
こゝろをみかくやますみの庵

庭若草　坂田泰子

こゝかしこみとりまはらに若草の
萠いてそめしそのゝうちかな

長閑なる日濱邊に出つ　田中竹子

磯菜つむあまの子ともに立ましり

おそふもたのし春のはまへに

海眺望　中牟田常子

日の御旗かゝけし船のけふも見ゑて
れは海原のにきはしきかな

霞中雲雀　河村重子

聲をのみ空にのこしてゆふひはり
かすむすかたのおもしろき哉

行路春雨　海上靜子

衣手はぬるともよしやふりそゝく
はるさめかをる梅のしたみち

諸葛孔明　安東弼子

柴の戸を三度とはれてわれを知る
人とはしめてゆるしそめけん

柳靡風　清水靜子

佐保姫の糸くりかへすたまやなき
咲くはる風ににしき織るらん

春雨　長谷川靜子

釜の湯のわきて靜けさはるさめに
木のめの香さへ打しめりつゝ

松　高橋美代子

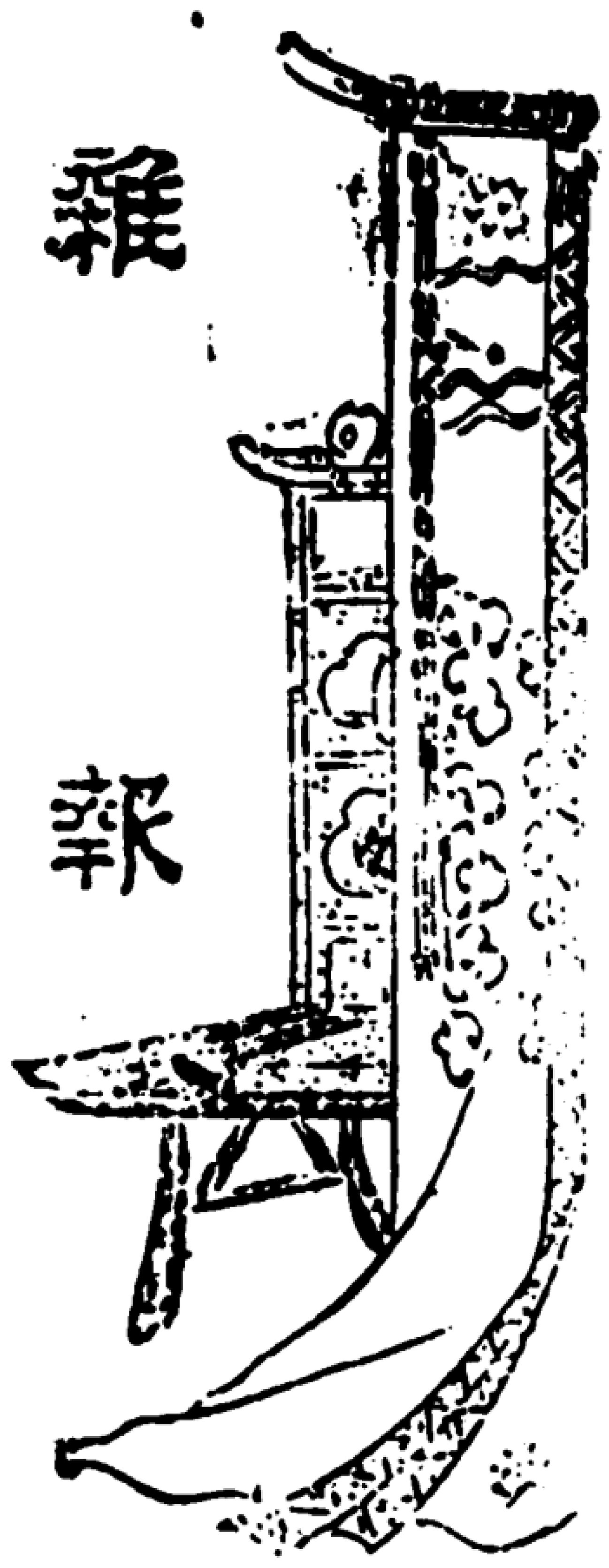
さゝ波の志賀のはままつ人とはゝ
むかしなからの色とこたへん

初めて鶯をきく　青苔

けさはめづらしう風のどかなるに、見出せし庭の梅が枝やゝほころびそめぬ。たれてめてのみれはせし老いたる人もにじりいでゝ、簀の子のはしにいでたまひ、空など見やりたまふに、木の芽にてまゐらせむ、火桶をなど心づかひせらるゝ中にも、まづ去とねをとあわたゞしくたちいづれど、徐に〳〵と手を

あげて制せさせ給ふ。何ゆゑともわかねど、そのづからつまあるきせられて、ゑづかにまゐらすれど、物はのたまはで指ざしたまふかたを見れど、庭のくまなるいさゝむら竹立くゞりつゝ、親にみちびかれたる雛うぐひすの、いとうれしげに飛びありく。一つは去年のふる聲、それてもさすがにめでたく、一つはまだ片なりながら、花さかむ春のさかゐ見ゐて、いとたのし。

鶯の子へと左とねはこへむ黄鳥の
　　はつ音もれやのたま物にして



雜報

●羽二重の献納　佐賀市八戸町、水町秀一郎氏の母は、たつ女は、過般、皇太子殿下御成年の御祝ひにとて誠意熱心を以て、自ら羽二重を織りて献納したるに此の程、中山東宮大夫より、同縣知事に宛てゝ、皇太子殿下御覧あらせられ、御満足に御思召され候云々の書面を送られたりといふ。

●紀元節詠進歌　紀元節御題「山榊」の詠進歌は左の如し。

正風
いつのよにねさしそめけん霊かゝる神路の山の五百枝まさかき
直大
畝火山たかくさかゆるまさかきは神のめくみによりてなるらん
豊穎
神代おもふ宵すか山のさかきはにかくるもきよし雲のしらゆふ
利嗣
鏡山しけるさかきにくもりなきみよのかけさへみねわたるかな
承昭
三笠山生ひしけりゆくまさかきは神代なからのねさしなるらん
詮
ちはやふるかみちの山のまさかきのさかゆくみよを祝ふけふ哉
光賢

鳥見の山まつりの庭のおもほねていまも榮ゆるみれのまさかき　迺普

謂てきてあふかぬひさみなかりけるうれひの山の峰のまさかき　長説

色かはぬ常盤の山のさかきははかみよながらにたちさかゆらむ　昌衡

年をへしうれひの山のさかきはのさかはひさしききみかみよ哉　元昭

千早ふるかみ代のまゝのさかきはのしけりあひたる天のやね山　利恩

畝火山みれのさかきは大みよさこもにかはらしときはかきはに　忠敬

あふきみる畝火の山のさかきははちさせなふとも色はかはらし　清

ちはやふる神代のあともしられけりゆふさりかくろやまの榊に　榮稻

かく山のいはれにおふる榊葉のさかゆくみよはさきはかきはに　益治

さきはなる山まつかねにたちならふ榊ちよのいろはみねけり　雅之

畝火山さしをふるきのまさかきにかけて神代のむかしたそ思ふ　昌延

昔しよりいろもかはらてしけりあふ峰のまさかき千年へぬらん　量弘

畝火山さしをへにけんさかきはのたかきみのけをあふくみよ哉　隆元

かきりなく榮ねんみ代はかみち山峰のさかきのいろみねにけり　長胥

よろつよもちもかはらすさかゆらんかみちの山のみれの榊葉　國夫

かく山にれさしも深く生ひそめてよゝに榮ゆる五百枝まさかき　正臣

榮ねゆくすねはにしろしうれひ山たてるさかきの本の根さしは　秋香

畝火山峰のまさかきまさきくもしみさかねゆくみよなこそ祝へ　粲

あしひきの山のかみさやあふくらんたかれの榊しめはへてけり　有經

たまたすき畝火の山のさかきたにむかしなかけてあふくけふ哉　正夫

うれひ山峰のさかきのいろみてもかはらぬ君かみよはしるしも　胤明

うねひ山神もうれしとおほすらんみれのまさかき榮ねゆくよを　英一

あまらしくゆふはかけても畝火山みれのさかきは神さひにけり　茂清

幾代へてかゝる大木となりにけんかみなひ山にたてるあまさかき

●小松宮の御養蠶　小松宮彰仁親王殿下には、夙に蠶事に御心を掛けさせられ、數年以前より特に群馬縣北甘樂郡富岡町養蠶家中の老手と推さるゝ佐藤國五郎氏を徵し、桑園の栽培蠶室の結搆蠶兒の飼育に至る迄、擧げて之を委ねられしが、爾來國五郎氏の監督其の宜きを得て、年々上簇每に良繭を獲らるるを以て、殿下は最と御滿足に思召され、前に九谷磁の茶器、幷に御紋附の三ツ組大銀盃の御下賜ありしのみならず、殊に宮內省の記錄にも留置かるべき殿下の御親筆に成る扁額に、國五郎氏の姓名を記されて授けらる。且つ後日の紀念にもと　殿下は御手づから寫眞器械を執られて、國五郎氏の影を撮られて與へられけれど、國五郎氏は芻蕘の身として光榮此上やあらんと、感極つて淚に咽び、是れとても固より殿下が經國の大業なる蠶事に御心を掛けさせらるゝより生ずる賜として拜し居るとぞ、又國五郎氏の嗣にして、蠶業講習所出身なる辰太郎氏も亦父と與に殿下の恩遇を辱うし、時に蠶種撿查として御館に伺候し、滯在中も數々謁を容されて、優渥なる令旨を傳へられ、或ひは養蠶の敎授として、伊豆三島の御別業に數多の貴嬪を生徒として訓誨したてまつりしが、本年も亦漸く蠶月に近づく爲め辰太郎氏は去月廿三日を以て、桑園增設等の命を拜して御館に伺候せりと云ふ。

●女子高等師範學校の擴張　我國現今の女子敎育は小學においてはやゝ普及せるも、中等、及高等の敎育に至ては、僅に高等女學校の外は、外國人の組織せる居留地內に宗敎主義の女學校あるのみにして、邦人の設立に係る中等以上の女學校は絕無と云ふべく

偶ま之が設立を企圖する者あるも、多くは一種の山子手段に非ずんば、單に營利を目的とするに過ぎず到底淑女の高等教育を託するに足らざるを以て、現任西園寺文相は國家經濟の許す度合に於て、女子師範學校を擴張し、大に女子の高等教育を企圖せんとて、爾來調査中なりと云ふ。

●孝子代々　ついきていとめでたき家あり。こは、豆州田方郡西浦村字木負に住む大沼彦右衛門といふものにて、其の長男彦太郎は、ことし十五歳の春を迎へたる少年なるが、頗る孝心のものにて、父の鮮魚を好めるを、賣りありくは鮮しからずとて、みづから、毎日、如何なる風波ある日をもいとはず、暇を見ては鮮魚を釣り來りて父に備へ、父のよろこぶ顏を見てこよなき樂とはなしけり。さて、其の父彦右衛門も亦孝心深きものにて、父存生中、酒を好みて飲みけるを、彦右衛門、うちはたらきて金を貯へ父の飲料にとて、別に善きもの數多買ひ置き、毎夜父の嗜めるを見て樂みけり。其の父の彦兵衛といへるも亦至つて孝行のものにて、かつて、其の上より賞與の金を得たることありといふ。かくて、いやつぎ／＼に子孫ます／＼うるはしく榮え行くを誠の人とこそいふべきなれ。

●孝子　秋田縣仙北郡小友村宮村新田の豪農大友友吉は、天性温良の人なるが、其の父、脊髓炎に罹りて苦惱するを日夜看護して、其の傍を去らず、奉養至らざる處なきに、一鄕きゝ傳へて模範となせりといふ。うれしきことなり。

●又孝子あり　名を大坂けいといふ、神戸市楠町二丁目二百七十番地に住む大坂竹藏の養女なり、いと貧しき上に父母とも病の床に伏しけるを親切に

看護し、少しもたゆむ色なきに、遠近のものども甚の孝行に感じ、物を與へて之を勵ますといふ。

●諫死　その夫放蕩にして家事を理めず、しばしばいさめしかど、すこしもきゝ入るゝけしきなきに、遂に汽車にしかれて諫死せりといふ烈婦あり。宇都の宮にて水車を業とする松本なにがしの妻なか。

●生徒三省錄　熊本縣の或小學校にては、生徒に帳面を與へ、日々己れを省みて、感じたる所を之れに記さしめ、敎員日々之れを點檢して批評を加へつゝありと、例へば、昨日は先生より敎室內に於て今少し靜にすべしと注意を受けました、以後充分愼みますとか、又は昨日書物を忘れたのは惡かつた、以後は決して忘れぬやう前夜から寄せて置きますなどゝ記入し、敎師は一々之れに批評を加ふるなりと。

●壯健の老夫婦　福岡縣筑前國嘉穗郡飯塚町の木村二叟八十二歲、妻照子七十二歲は、夫婦のなかに男女の子七人ありて、長男を順太郎といふ、歷代の造酒屋にて、指をりの金滿家なり。このごろ、二叟は、和歌をよみ二絃琴をしらべて、福岡市久留米市を遊歷のついでに、肥後國菊池郡の梅樂軒を訪ひて詠歌彈琴を樂しみ、詠歌は二絃琴にしらべて唄へり。其の席に集へる歌人の歌はさらなり、自分の當座の作歌は「朝露」なり。ふしおもしろきしらべにて、

梅のはなにほへるやどのあさぼらけ
　なきてきかせよみやまうぐひす

と唄へり。又鹿本郡。柿園の集會にては、「夕雲雀」を

しをりなき空にのぼりてかへりくる
　みちもまよはぬゆふひばりかな

是をはじめ、出會の歌人の作は、ひとつももらさず琴にかけてしらべてうまざるのみか、行歩には杖を

とらず、數里の行程木履をふみて往來してつかるゝ氣色なく、每朝早起て水をかぶり身をきよむるなど、常ひとのれてなひがたきふるまひ感ずるよりほかなし。妻の照子は家にありて子孫の敎育にちからをつくし、家風ますます隆盛なりといふ、

肥後　松風舍主人しるす

●哀なる貧人　遠州中泉のある處に、親子七人暮の貧人の家內あり。頃日物價騰貴のをりにもかゝはらで、常に上白の米を食ふは怪しとて、疑をうけ、其の筋の役人其の家に行きて、米の出所を質せしに、親なるものは淚をはら〳〵と流し、こは思ひもよらぬ御疑ひかな、これ見て給へとて飯櫃出すを見れど、上白米と思ひしは豆腐の殻にてありけるに、役人も哀さ催し、金若干を惠みてたちかへりきといふ。

●美談　三河國西加茂郡に正木直治郎といふものあり。未だ其が十六七歲の頃、叔父某、直治郎にむかひていひけるは、汝が如き赤貧のものは、甥として親近するに愧づ、以後は我が家に來るべからずと。直治郎此の言葉をきゝて大に憤慨し、夫より一身不亂に農事を勵み、遂に村內屈指の金滿家となり、四十年目に、はじめて叔父に對面せりといふ。少年が身を立つる好き鑑なり。

●少女の遺言　馬關文關小學校の三年生に福尾ちくといふ子ありしが、此のほど病にかゝりて、ねたゝず、遂に死なんとするとき、其の父母に遺言しけるは、われ死したる後、厚く先生の高恩を謝し、且、平生小遣錢を險約して貯へたるあれど、之を品物に替へて、暇乞として同級の女生徒に贈らせ給へと言ひたはりて逝く。聞く人感淚に咽ばざるはなかりしと。記者もそゞろにかなしうてなん。

●あないまはし　かゝる談、聞きたくもなきことなれど、あまりのことなれどいふなり。一は懲らしめにもとてなん。福岡縣築上郡山田村の富豪吉川なにがしの娘にわくといふあり。本年十五歳の少女にて、未だ小學校に通學せるものなるが、いつしか妊娠の身となりて、このほど男兒を分娩したり。父母おどろきて其の親を問ひしに、情夫二人ありて何れとも分かず、はては抽籤もて其の親を定めたりとぞ。あきれはてゝいふべきことも知らず、書くだもいまはし。きゝ誤りにもあらんか。

●懷妊自在方につきて　前號に、墺國維納大學の教授シエンク氏が、男女懷妊自在法を發明したることを記しゝが、此の法につきては、學者中種々の評論あるよしにて、米國のプリンストン大學のマクロスキー氏の說は、シエンク氏と反對にして、滋養饒多なる場合には女兒を生むといへり。夫は、大麻を肥沃の土地に蒔けば雌を生じ、瘠土に植うれば雄となるが如し、其他蜂の勞働種も、美味を以て育つれば女王となり、鯢魚を食ましめて養はゞ、普通食物を以て養ふよりも雌を生むこと二倍多し。而して蝶の如き、食物欠乏すれば雄を生むを常とす。是を以て、人の母に男兒を生ましめんとせば、其衰弱を來さゞる限り、滋養物を輕減して食せしむれば可なりとなり。此の滋養分饒多なる場合に女を生むとの說は、從來行はるゝ說にて、是は、世に、食料多き時は女を生みて蕃殖を速にするを天理とす。との理由より來りしなりど。此の理と、シエンク氏の說と、何れが其の實を得たるものか、今は知り難し。漸く學理の進歩するに從ひては、遂に一に歸する處あらん。

●都をどり　やがて嵐山、吉野の櫻花咲き匂ふ頃は、例の都をどり催さるべし。さて、その歌は、冷泉爲紀伯の作れるにて、左の如しといふ。

「白々と、しらけたる夜の、月影に、雪かきわけて、梅の花、兒束ながら、一枝を、手折る袂に、散りかかる、その白妙の、かぐはしく、薫るにつけて、梓弓、春來にけりと、知られつゝ、寒さ忘れて、大御代を、いはふ例も、久方の、のどけき空を、もろともに、君が惠みや、あふぐらん。

たん歌「おしなべて、梁の白木綿、かけてけり、いづれさか木の、梢なるらん。

「春の彌生に、咲きにほふ、花うるはしき、桃山に、城の本丸、二の丸も、夕日まはゆく、かげさして、光輝く、たちものは、あふぐも高き、呉竹の、伏見の里に、殘りけり。

「紅葉踏みわけ、なく螢、しかとは見ねず、川つらに、あまた飛びかふ、涼しさは、昔の夏も、かはらじや、まだ夕暗の、宇治橋の、ゆきゝ賑ふ、婦の袖、川風かをる、欄干は、立ち去り難き、ながめかな。

「寺のめぐりも、高臺寺、み山の奥の、つくり庭、紅葉のちしほ、染め織く、色にひかれて、秋毎の、なさけをこめし、面影を、うつしてこゝに、日の本の、光を仰ぐ、豊臣の、榮の跡を、偲ぶなる、舞の手振は、古への、出雲の阿國の、ならびなき、歌舞伎踊に、しかすがも、開けし御代の、立姿、優しき中の、どこやらに、雄々しく見ゆる、少女子の、錦の袖は、もろ人も、めでゝ此處にや、集ふらん。

「樂みな、聚めしといふ、聚樂御所、朱の階、玉のけた、五色の柱、その道の、工匠が、小夜すがら、かづく衾の、あや錦、ゆかしき夢も、さめて今朝、あけて砌の、霧げしき、黄金の屋根に、白銀の光を添ふるさやけさは、心詞葉に、盡きもせじ。

「かゝる名高き、神なれば、三百年の、御祭を、仕へ奉ると、都人、鄙人までも、集ひ來て、今年の春のにぎはしき、神垣かけて、あふぎ見る、阿彌陀が峰も、打かすむ、松の木の間に、咲く花の、朝日に匂ふ、勳功を、千萬人や、慕ふらん。

●老狐汽車を驚かす　此程の事なりとか、山陽鐵道上り列車、山口縣都濃郡下松驛を發して、字魚が緣と稱する迄處進行せし時、不思議や向ふより突然に進行し來る列車あり。頻りに汽笛を鳴らして危急を報ずるに、大に驚きて進行を止めければ、彼方も亦進行を止めぬ。よりて、車掌を下松驛に引返さしめ、電話を以て島田驛に照會せしに、同驛よりは臨時に汽車を發せし覺えなしとの答へあり。然れども、

狐狸の所業にもやあらんと、速力を強めて進行を始めしに、彼方も亦た速力を加へて進行し來り、兩車衝突したりと思へど、彼方の汽車は忽ち消失せたり。不思議に思ひて、翌朝驛員を馳せて同處を撿せしめしに、二頭の老狐轢死し居たりと。今の世にても斯る不可思議あるものにや。

●死亡類別一覽表　この表は、東京日本橋區の醫士青木英雲氏の製りしなり。

死─無病　六十歳以上　二百歳以下　老衰（即ち天壽）死

胎死
- 不育…營養不良─房事過度
- 母病…惡阻劇甚─子宮病─梅毒─熱病等性の類
- 母死…胎兒健全なりしも母體の病死─變死等の類
- 變死…臍帶纒絡─墮胎術─穿顱術─子宮外の妊娠

病死
- 遺傳…結核─梅毒─癩病─腺病等の類
- 自招…大酒─暴食─亂淫─亂行─過勞等の類
- 感染…氣候─觸接─豫防不全
- 特發…遺傳なく─不發生なく─感染の路なきもの

變死
- 自殺…發狂─事情─誤死
- 他殺…暴殺─故殺─誤壓─刑殺等の類
- 災難…燒死─溺死─壓死─墜落─震死等の類

●本號の附錄　ひたち帶、記事輻輳の爲久しくは掲げざりしが、こたび纔に餘猶を得て、第百四十一號の續きを載せつ。さて、あまれるはつぎ〳〵に掲ぐべし。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。

書式に違ひたるはすべて沒書とす。

○婦人は何人にても投稿隨意たるべし。

●女鑑月並歌文兼題

四月五日｛歌……机　文……古戰場｝三月廿五日〆切

四月廿日｛歌……蝶戲花　文……試驗及第を祝す｝四月十日〆切

歌文原稿、〆切期日までに本社に到着せざるものは、すべて沒書とす。

●賞品

來る四月廿日の佳題を期し、當撰者には特に左の賞品を送呈すべし。幸に金詠玉作を惜しみ給ふ勿れ。

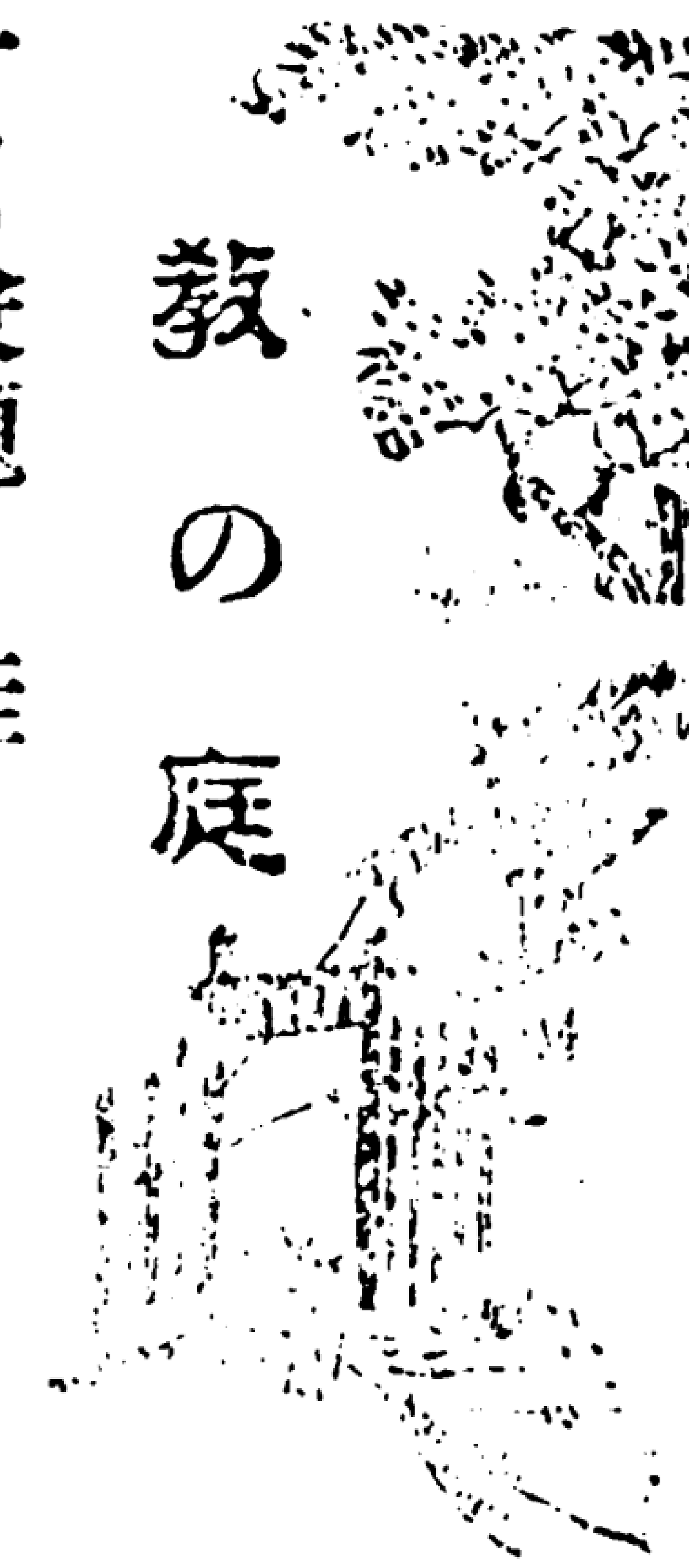
歌文共

天には　皇朝婦女鑑（靜思舘近刊）第一編第二編　一部

地には　皇朝婦女鑑（全）第二編　一部

人には　明治の女傑　瓜生岩（日本赤十字發行所著）一部

秀逸には、各　慈善の泰斗　常陸帶（安藤朴翁著）（女鑑附錄別製）一部宛



教の庭

三月廿日兼題　蛙

天　出雲國飯石郡一宮村　山根久子

治まれる御代は門田のかはつさへ
君か八千代をうたひてそなく

地　東京市下谷區徒歩町二丁目十六番地　住山幾子

かきつ田も埋る丶はかりちる花を
をしみかはにもかはつなく也

人　伊豫國温泉郡三内村大字河ノ内　近藤よし子

せきいれし門田の水をたよりきて
ところゑかほになくかはつ哉

人　大阪市北區宮田町百十四番邸　兼子織部子

歸りちをいそく田のもに聲たて丶
ゆふつけかほになくかはつ哉

秀逸　（二十首）

せきいれし苗代みつをよろこひて　徳永萬壽子
聲おもしろくかはつなくなり

はるふかく霞む田川のゆふまくれ　名取正代子
こゑをつくしてかはつなく也

花くもりやかて雨ともなりぬへし　坂田きみ子
門田のかはつなきしきるなり

ゆく春をなれもをしくや思ふらし　春永己巳子
はなちるたゐになくかはつ哉

花ちらす雨ともしらてこ丶ろなく　久松とく子
ふるをうれしとかはつ鳴く也

ゆたねまく門田の水はにこれとも　畠山百合子
聲さやかにもなくかはつかな

あせこゆる苗代みつのゆたけさを　山田璋子
よろこひかほにかはつ鳴く也

さくらちるいさら小川にゆふ月の　近藤ふく子
かけもにほひて蛙なくなり

きのふけふみつせきいれし苗代に　日吉あき子
はやすみなれてかはつなく也

春ふかみかすむ野澤のつきかけに　中澤千野子
こゑおもしろくかはつなく也

せきいれし小田の苗代みつましてところえかほにかはつなく也　河田いし子

あすは又雨とやならむおぼろ夜の月さす小田にかはつなくなり　飯塚みつほ子

苗代にせき入るみつのおとそへて聲もおもしろくかはつなくなり　増田益子

われはてしやとの池水きてみれはあるし顔にもかはつなくなり　諸井久良子

つれ〳〵の友なき宿のさびしさをなくさめかほになくかはつ哉　竹田碧子

うちかすむ月たにあるを春の夜のあはれをそへてなくかはつ哉　山井浪子

ちる花をかさしとなして古いけにこゑかしましくかはつなく也　青木たま子

かげ見えて井手の山吹ちりぬれは聲あはれにもかはつなくなり　外川益子

夕つきのおほろにうかふ川みつに聲さやかにもかはつなくなり　林　久子

さくらはな移ろふ影やみえつらん水のそこにもかはつなくなり　服部かつみ子

（以下原稿到着順）

せきいれし小田のみさはに聲たてゝさきまちゐぬさかはつなくなり　田部里子

夜をこめて星のかけかやしのふらんかはつのこゑのすみてきこゆる　沼澤みれ子

山ふきのはなちりうかふ川みつにはるをふかめてかはつなくなり　佐々小夢子

水たまる池のさゝなみはなさきてなくやかはつのこゑののどけさ　佐々有都子

ゆたねまく畦はひへりて小やま田にゆふつきしろくかはつなくなり　西川順子

雨たゝくかさ田のみつやましぬらんうれしけにこそかはつなくなれ　中山さみ子

夕されはたにの小かはのみなそこにこゑおもしろくかはつなくなり　佐々値嘉子

やまふきの花のかけゆくいさゝかはみなそこきよくかはつなくなり　横山柳子

夕まくれはなちりかゝるさくらたにあはれふかめてかはつなくなり　若松操子

ゆふ月のかけおほろなるいけみつになくやかはつのこゑさやかなり　工藤仁子

水そこのかはつのこゑもさきたゐてひさにしらるる世にもあふかな　澤田春子

しつのたかなはしろいそく小山田は
すたくかはつのこゑもひまなし　河野文子

はるかすみたなひく庭のゆふくれに
いけのかはつのつまこひてなく　牧谷幾子

のさかにもかはつの聲そきこゆなる
やりみつぬるむはるさめのそら　堤彬子

ふく風にはなちりかゝるやまの井の
かけみれみつにかはつなくなり　美奈井芳子

さくらちる川のみなもさゞめくれは
たしみかほにもなくかはつかな　吉田三千代子

しつのたかなはしろいそく小山田に
さもよふかはつかしましさかな　小澤ゑん子

新小田にまた住みなれぬこゝちして
つまよふかはつこゑしきるなり　杉浦芳子

さくら川ちりてながるゝはなかけに
はるをしめても鳴くかはつかな　名取よし子

しつか家のあたりさひしき古井戸を
我かものかほになくかはつかな　磯部しう子

三つ二つはなちりうかふやまの井に
こゑにほはせてかはつ鳴くなり　久松せい子

苗しろにみつうち入れしその日より
こころねかほになくかはつかな　高橋きむ子

立ちこめしかすみのおくの千町田に
あめのかはつのころひねになく　溝口良子

うつりゆく春をうしとやかこつらん
いけのみきはにかはつなくなり　高島藤子

よし野川なかれてはやくゆくはるを
さゝめかほにもなくはかつかな　永井さい子

わかやさはなはしろちかみあさゆふに
かはつのこゑをなれてこそきけ　富士村幾子

賤かやの夕けのけふりくもさみて
やまたのかはつあめよはふなり　金森俊子

高き枝をめさすかはつのこゝろもて
まなひのみちは行くへかりけり　山手てい子

はるかせのまたさむけれささ川の
まこもかくれにかはつなくなり　萩原章子

さくら川はるをさそひて行くみつに
こゑおもしろくかはつなくなり　畠山清子

降るあめの近つきぬらんかしましく
いけのかはつのこゑそきこゆる　畠山千代子

吹くかせにさくらちりゆく山の井の
きよきみつにもなくかはつかな　樋野龍子

池のおもにちりてうかへるはなひらを
ふれさおもひてかはつなくらん　井田みさ子

ふる池のみぐさかくれに鳴くかはつ
たへぬおもひをひさに告くらむ　赤沼香枝子

賤の男かうちしはり田にかしましく
かはつ鳴くなりはるのゆふぐれ　坂いさむ子

こゝかしこ淀みしみつのあさゞはに
　こゑもなしまず鳴くかはつかな　佐藤喜代子

よし野川はなのみならさゝほけれと
　ちるなをしみてかはつなくなり　竹村竹里子

はるさめににごる山田のなはしろに
　かはつなくれのさやかなるかな　谷口ふさ子

みこもりにあやめつのくむいさゝ川
　なりしりかほにかはつ鳴くなり　高橋ちん子

たにかはの岩間くゞりて行くみつに
　こゑもなかれてかはつなくなり　鈴木衆子

瀬をはやみしからみこゆるたには淵に
　こゑもなかれてかはつなくなり　小松開若子

やまふきのはな咲く宿のいけみつに
　つまこふかはつなきかはすなり　山河俊子

小山田のこのもかのもになきかはす
　かはつのこゑのあはれなるかも　山河登和子

よした川きよきなかれのみつあさみ
　こゑもひまなく鳴くかはつかな　宮　秀子

おぼろ夜のつきかけやどる小山田を
　我かものかほにかはつなくなり　大沼よし子

をやみなくふる小さゝめのさよ中に
　さもよふかはつこゑあはれなり　淡谷きよ子

はるさめに山田のみつはにごれとも
　かはつのこゑはにごらさりけり　能登まう子

行く水のいろをふかめてもにいつる
　やなきかもさにかはつなくなり　淡谷いく子

ちる花のかけなつかしきたけかはに
　ふしおもしろくかはつなくなり　白石梅子

花ちりて汲むひともなきふるき井に
　よはをもしらすなくかはつかな　平野しづ子

はるさめの淋しくふれるゆふまくれ
　こゑかしましくかはすなくなり　石川圓子

山かはにちりてなかるゝやまふきを
　なれもをしさやかはつなくらん　山木能子

春ふかくなりにけりさはよしのかは
　きしのかはつのねにそしらるゝ　高須幽鬼子

ゆく春をなほをしみてかたにかはに
　こは音そろひてなくかはつかな　濱野吟子

春さめのしくしくふれるゆふまくれ
　こゑもあはれになくかはつかな　眞島千鶴子

わかやどのかどの水田にはるさめを
　うたふかはつのこゑののどけさ　山内蔦子

ゆふつきの影ものこりてわかゝどの
　いさら小川にかはつなくなり　田中恭子

はるさめのふるの山田のゆふくれに
　ふしおもしろくかはつなくなり　大寺濱速子

あすか川さまらぬみつにこゑたゝす
　はるをゝしみてかはつなくなり　稲原蓮子

かすみたつちよのたつらに打むれて　なくやかはつのおもしろきかな　加藤壽惠子

あしひきのやまたのくろの春ふかみ　なくやかはつのかしましきかな　加藤眞子

さくらはな散りてたゝよふ池の面に　こゑもかなりてかはつ啼くなり　栗林やよひ子

小山田にみつせき入れてしつの男の　かへりしあとにかはつ鳴くなり　栗林かよ子

あめそゝく小川のなかにこゑたてゝ　なりねかほにもかはつなくなり　佐々さし子

はるさめの雫の田井のゆふくれに　こゑさひしくもなくかはつかな　平野定子

まゝならぬかせを恨みて鳴くかはつ　うきよのさまもかくやあるらん　小田中靜子

苗しろのこのもかのもにみかくれて　さもよひかはしなくかはつかな　篠田豔子

きのふきふあすかの川に住むかはつ　さききにけりさこゑたてゝなく　細川ますゑ子

おぼろ夜のつきかけかすむ花の上に　あめを知らせてかはつ鳴くなり　片宗稻子

さくらはなあめにちりゆく夕まくれ　なくやかはつのこゑさかりなり　浦井豐子

夕まくれちりゆくはなにさそはれて　かさたのかはつかたりそめけり　浦井清子

田の面はなはしろ水のみてれとも　かはつのこゑはかくれさりけり　藤川りか子

わか門のいさら小川になくかはつ　さもよひかはすこゑあはれなり　勝尾敏子

きて見ればふるゐの水になくかはつ　ゆふへさひしくきこゆなるかな　勝尾まさ子

きのふけふふりにし雨もおさたねて　いけのたもてにかはつなくなり　石井信惠子

かされたるきぬも今なほかへなくに　いけのかはつは鳴き初めにけり　所佐以子

やまさくらちりてなかるゝ谷かはの　花ないかたになくかはつかな　志岐久子

しつの男か種まく小田のなはしろに　おのかすみかさなくかはつかな　羽田三緒子

よし野川さくらなかれてゆくはるを　さゝめかほにもなくかはつかな　高砂喜代子

さくらさく時にしあれはかはつなく　こゑものさかにきこゆるかな　佐久間八重子

きみか代ののさけき春はかはつさへ　みれのさくらを見つゝなくらむ　三階みさを子

とふ人もたえてさひしき小やまたに　こゑをつくして鳴くかはつかな　庄司まつ子

やり水におほろ月夜のかけみえて　うたよみかほにかはつなくなり　丸山かつ子

やまふきのちりてなかるゝ河きしに
こゑふりたてゝかはつ鳴くなり　西谿子

行く人のこゝろせかるゝゆふかはつ
さらでもあめのふるさてやなく　田中ゑん子

春されはあさよひこさにこゝかしこ
かはつ鳴くなり小やま田のさと　玉置品子

ほし月夜かけほのくらき小やまたに
かはつのこゑのたゆるまもなし　玉置陽子

霞みつゝくるゝかさ田になくかはつ
つきや待つらんあめやまつらん　小川愛子

苗しろの田のもかすめるゆふつきよ
もの思ひかほになくかはつかな　久間春子

つく〱さ春さめかすむいけしりの
みくさかくれにかはつなくなり　須磨純子

池ちかくさくやまふきのうつりてや
もろこゑたかくかはつなくなり　栄女

ゆふつきのかけさへうつるさる澤の
いけにすみてもかはつなくなり　関はま子

時しりてあめよふかはつあはれなり
そほふるさるさのいけのたまもに　三井信子

散りうかふ花のにほひにうかされて
さひいるかはつこゑきそふなり　河村君子

ちる花に身をたくへてや小やまたに
なけるかはつのこゑあはれなりは　林環子

はる雨のなこりも知るや小やまたに
みかくれてのみかはつなくなり　岡本好子

昨日までふゆこもりせしかはつすら
さきなはかほになきそめにけり　下田廣子

なはしろに水せきいれしゆふへより
こゑかしましくかはつなくなり　佐々木麗子

あをやきのもゆる池へはみつぬるみ
そこのかはつのいまそなくなる　穂積稔子

やまふきの花もなかるゝささかはに
かはつさもよふはるのゆふくれ　飯塚さよ子

さなへさるかはつも田歌ならすらん
ふしおもしろくこゑたてゝ鳴く　良永美知子

春ふかみ井手のあたりのゆふくれに
はなををしみてなくかはつかな　福原たま子

やまぶきのちりてなかるゝかは水に
ゆふへさひしくなくかはつかな　福原しげ子

あしひきのやまふきの花ちりくるを
わかよのはるさかはつなくなり　木村こう子

れせりつむ春のかはへにみかくれて
こゑものさかになくかはつかな　福原つる子

春ふかみなはしろいそくをやまたに
ふしおもしろくかはつなくなり　松崎こう子

はるさめに身をはぬらしつ川そひの
くさ間にむれてかはつなくなり　綿野りき子

やまぶきのちりてながるゝたま川の　いは瀬さよもしかはつなくなり　岡田友子

きのふけふはるさめふりて池の面に　三つ四つ二つかはずなくなり　藤田園子

ものいはぬ色にはな咲くやまぶきの　つゝ井のもさにかはつ鳴くなり　太田淑子

さくら田に散る花ひらをおひながら　鳴くやかはつのこゑに匂ふらむ　太田さき子

やまぶきの花ちるきしにうちむれて　なくやかはつのこゑおぼろなり　杉村貞子

ものおもふ身には一しほあはれなり　いけのかはつの夕くれのこゑ　橋本辰與子

やまぶきの花かげうつるいけみつに　ゆふくれまたてなくかはつかな　池田みさを子

さくら花ちりにしあさなしみつゝ　かへるがきたにかはつ鳴くなり　林やす子

さくらちるふる江のみつに春さひて　こころも去らすかはつなくなり　増田丹眞子

あすはまた雨にやならん夕されは　もよひれしけくなくかはつかな　濱田なほ子

やま吹のちりてながるゝかはのへに　こゑもに匂ひてかはつ鳴くなり　大熊つれ子

あはれにも散るやまぶきの影しめて　ゆふへさひしく鳴くかはつかな　大熊よう子

はるの日の遊ひくらしてかへるさに　かはつのこゑなきくもうれしや　舘脇ます子

水そこにしのひてなけさつまこひの　かはつのこゑはまかはさりけり　吾妻ちか子

春かせになびくやなぎのかげにきて　かはつのこゑなきくもうれしや　池谷富子

すきかへす田のものかはつ昨日より　けふはこゑこそまさりゆくなれ　戸塚てつ子

雨なよふかはつのこゑなよそにきく　はるのゆふへそしつけかりけり　中桐杏子

いつしかも吹く春かせにさそはれて　いけのかはつのなき初めにけり　松本さの子

ゆふされは野さはのみつに友よひて　こゑおもしろくかはつなくなり　松本その子

やま里のかきねのもさにつさひきて　にこりしこゑになくかはつかな　宮岡彦子

ほさもなく暮なんはるをなしみてや　小田のかはつのこゑしきるなり　外川さい子

春ふかみちりうくはなにあめそゝき　かはつなくなり井手のあせみつ　竹村てい子

春たけてさくらちりうくいけみつに　こゑもかなりてかはつなくなり　大柳さよ子

雨そゝく田かはもいまやみつまして　こころねかほにかはつなくなり　市橋さし子

山ふきのはなかけうつるさはみつに
　　こゑさへすみてかはつなくなり　市橋きく子

明日もまた雨になるらんわかにはの
　　いけのかはつのこゑのはけしさ　仁保志磨子

居すかたは膝なり手つきひぢはりて
　　ゐやなだゝしくなくかはつかな　佐々木貞子

すみだ川はなのさかりになりぬれは
　　こころねか注になくかはつかな　森蝶子

さくら花ちりてなかるゝさかはに
　　かはつなくなるこゑあはれなり　野口さん子

雨そゝきこれもあはれにきこゆなり
　　小田のかはつのゆふくれのこゑ　生熊つれ子

やまふきの花のちるなやなしむらん
　　あせこすみつにかはつなくなり　榊原八千代子

たそかれにつまやよふらんこゑ高く
　　あら田のそこにかはつなくなり　酒井みさ子

苗しろのみつにやされるつきかけを
　　めてゝや夜たゝかはつなくらん　金原吉子

やまふきの散りてうかへるたま川に
　　いはぬおもひなくかはつかな　野中あさ子

春もはやさくらやまふきちりしきて
　　ゆふへさひしくなくかはつかな　下元もさ子

苗しろのみなくちまつるゆふへより
　　こゑにきはしくかはつなくなり　宇高松子

賤のなかなはしろいそくなやまたに
　　あめよふかはつなきしきるなり　森琴子

うくひすのなけさゝまらてちる花な
　　まつやかはつの水にうきいでゝ　上野君子

風わたるよしののかはにちるはなの
　　ゆきなかつきてかはつなくなり　二宮春枝子

おほろよの月のにほひにうかれ出て
　　小田のかはつのこゑなきくかな　由井すみ子

夕くれにもの思ひをれはかはつなく
　　こゑもさすかにあはれなるかな　高松貞子

山さくらちりてなかるゝそまかはに
　　ゆふへきひしくかはつなくなり　矢島ねい子

いはまよりわきてなかるゝいつみ川
　　きよきすみかさかはつなくなり　磯野こさ子

せきいれし水をよるへさはるさめの
　　ふるたのかはつなきあかすなり　海津稲子

夕されはふし見の小田のみかくれに
　　こゑもひまなくかはつなくなり　吉田すみ子

時きぬさしつかかさたのなはしろに
　　むれてかはつのしのひれに鳴く　木村きく子

見るからに風もこほるゝはるの夜は
　　かはつのこゑもきゝきこねけり　松原文子

水のいろも音もさやけきたまかはに
　　たまのこゑしてかはつなくなり　東園櫻子

うちよするほり江の波に身かくれて
すだくかはづのこゑぞゆかしき　川崎きく子

せき入るゝ小田の水にさ身がくれて
をりしりがほに鳴くかはづかな　今瀧すゑ子

さくらちる小川のすゑにみがくれて
つまよぶかはづこゑしきるなり　大條和久利子

なはしろのみな底さへやかすむらん
こゑおぼろげにかはづなくなり　志岐榮子

行く春をさゝめかれてやなくかはづ
くるゝたおもにこゑもをしまず　阿保松子

あめふれば聲もひさしほにきはひて
やま田のくろにかはづなくなり　駒井一女

早苗さる田子のいたつきくみさりて
鳴くかはづのこゑあはれなる　山鹿虎子

うたゝ寐に小田のかはづの聲聞けば
過ぎしむかしの忍ばるゝかな　山崎さく子

明日もまた小雨ふるらん小夜ふけて
をちの田の面にかはづなくなり　大友倫子

たそがれにおぼつかなくも行く路の
かなたのいけになくかはづかな　岡澤のぶ子

春ふかみこずゑはなれてちるはなの
たゞよふみづにかはづなくなり　武田梁子

をちこちにかはづの聲ぞきこゆなる
あすはあめにやならんさすらむ　岡田鷗子

はるもやゝ日かず少なくなりぬらむ
鳴くやかはづのこゑのひまなき　堀西愛子

やまぶきはむかしながらに影見えて
荒れにしいけにかはづ鳴くなり　飯塚むつ子

春さめに四方のけしきもいやまして
今朝めづらしくかはづなくなり　尾澤知子

ちりそめてさくらながるゝやま川に
をしみがほにもなくかはづかな　進藤佐千子

月かげのやどれるにはのいけみづに
さもよふかはづこゑしきるなり　進藤ゆき子

夕さりてとふひともなき我かゝさの
いさらをがはにかはづなくなり　田中英子

わがやどの池のみぎはの蘆かくれに
つきよをきよみなくかはづかな　田中淑子

おしなへて春くるゝをやをしむらん
小田のかはづのしげくなくなる　佐藤みゆき子

芹つみしうなゐのこゑもしづまりて
くるゝ門田にかはづなくなり　折田さい子

もろ聲に田をさよもして鳴くかはづ
おなじこゝろになにおもふらん　野路ちか子

さくらはなちりてながるゝささ川に
こゑもにほひてかはづなくなり　屋磨高繁子

こゑたてゝ池のうきもになくかはづ
わがせこはなやこひしかるらん　岸田はつ子

ゆふされはいさこゝとはんあせ道に
　小田のかはつのこゑしきるなり　宮田敏子

はるさめにやなきの色もまさりけん
　したゆくみつになくかはつかな　宮田しず子

まろき橋ねたりかれたるささかはの
　まこもかくれにかはつなくなり　藤井芳子

あすか川かはゐはや瀬もしかすかに
　かはつのこゑはなかれさりけり　土川田鶴子

つれ〴〵に門田のこみちたとりゆけは
　ふしおもしろくかはつなくなり　河原よし子

時きぬといはしろ小田にこゑたてゝ
　かしましきまてかはつなくなり　中村こと子

あすは又あめにやならんつきかけも
　おほろになりてかはつなくなり　佐藤玉子

しめやかに雨ふるさはのいけのおも
　こゑをかきりにかはつなくなり　足立千代子

近江なる野路のたまかは名のみにて
　いまはかはつのこゑそのこれる　鈴木高子

夜もすからつきてり渡るいけみつに
　なにをかはつのなきあかすらん　坂田てつ子

やまふきの花みたれちるこのゆふへ
　わたしはさほくかはつなくなり　竹内正子

やまふきの花うつろひしゆふへより
　井手のかはつのこゑしきるなり　高田きよ子

やましろの井出の玉水はみつきよみ
　こゑさはやかにかはつなくなり　笹子節子

春の夜のつきはかすみて吾かやとの
　かと門のみつにかはつ鳴くなり　田中みつ子

しつの男かなはしろいそく小山田に
　さころねたりさかはつなくなり　高橋かね子

いまははやさくらの花もちりはてゝ
　かさたのかはつこゑ老いにけり　春野花子

さなきたにものおもはるゝ夕まくれ
　なくなるかはついさゝかなしも　浅野絹子

ゆふまくれ花ちりかゝるやまの井に
　あはれふかめてかはつなくなり　野間錦子

山ふきのはなのちるをやをしむらん
　井出のかはつのこゑもあはれに　無名

ありあけの月かけやとるいけみつに
　なほこゑしけくかはつなくなり　酒井ぎん子

おもしろく心やらるゝはるさめの
　ふるたのあせにかはつなくなり　白井さな子

すかのねのさすかになかき春のひも
　くるゝとつけてかはつなくなり　村松みち子

さよふけてふるしくれさへ淋しきに
　あはれをそへてなくかはつかな　楢花雄子

山ふきのはなちりかゝるやまのゐに
　こゑをつくしてなくかはつかな　長松かね子

夜をふかみいやかしましく小山川の
さひしきささにかはつなくなり　渡部千世子

道すがら小田のかはつの啼くこゑを
きゝつゝかへるやまさとのいほ　加瀬つや子

つまふきのちりてたゝよふ玉かはに
はるををしみてなくかはつかな　仲田衛伊子

上津瀬にたねすかはつのころ〳〵さ
あさよひなにをかこつなるらん　大谷友子

さくらはなちりて浮へる池のおもに
をしみがほにもなくかはつかな　遠藤らく子

くれてゆくはるの名殘のをしゝさや
いけのかはつもなきまさるらむ　遠藤雪子

三月廿日兼題　海人

天

京都市今出川通り室町東入　東園櫻子

かはの色の黒うならむことを恐れては、濱風をいとひ、百歩に足らぬ渡し舟にも、船暈を感ずるが如き、深窓の女子などは、彼の海人のしはざは、夢にだに知らざらむ。誠や、板一重の下は、現世の地獄ともいふべき大海原に、しかも、木の葉なす小舟に乗りて、うきつしづみつこぎいづときくさへ、身のけもよだつなるを、只、一筋の腰つなをたよりにて、磯打つ音は、鳴神の百千、一時に落ちたるが如く、よせ來る波は、連なる山々の、倒れかゝるが如きあら波の、其のちひろの底に、身をしづむることよ。彼も、同しく人の子なり。其の骨も、其の姿も、又、つゆことなることなき女の身なるを、只、不幸にして、詩歌管絃の樂みしは愚か、普通の教育だにうけえぬ、鄙のはてに生れ、風に櫛り、うしほに洗ひ、磯の枕、浪の衾に馴れて、波上の生涯を、たくなはの苦しとも思はぬなめり。哀いとほしの海人の身や。去れど、高き賤き、品こそあれ。世にかゝる品を、賤女とのみいひ下して、身は、玉のうてなにいつかれ、風もあてじ、ちりもすゑじと、もてかしつかるゝ人の、やがて、一家の妻となりて、浮世の海を渡らむにも、又荒磯はあるべく、大浪も來るべし。彼のしはざにも、をさをさ、おとらぬ辛さ、つらさもあるべし。おもへど、やがて、わがとちも、亦浮世の海人なりけり。其の荒磯に下りたち、其の大浪にかづきて、あはびしら玉ならぬ、清くたふとき名を得てむには、はた、いかで、海人のしはざのみ、よそに見すごされむ

やは。

地　千葉縣安房郡豊田村谷見　三熊みさを子

世のなりはひ、さま〴〵ある中に、海人の業ほど、あさましきものはあらじ。水無月の身をこがすむかりあつき日も、日ねもす磯邊に釣を垂れ、寒さ肌を裂く冬のあしたも、八重の潮路に舟出して、網手ひきつゝ漁りありき、藻鹽やく浦の苫屋の烟、淋しげに打ち靡く秋の夕暮も、何こりずまに波をかつぎ、小貝あさるなど、いと樂しげに見ゆるものから、いとあさまし。うき定めなき海の上を、天地とし、處せき舟の中を、世わたるたつきとして、雨のふる日も、風の夜も、潮だれ衣身にまとひ、吹きすさぶ風と戰ひ、逆卷く波と爭ひ、一たび過ては、一船忽ち溺れ、底の藻屑と消えはてゝ、よるべ渚の妻や子を、愁の波に漂はせ、あるは、夜もすがら、漫々たる海上に、いづこともなく漂ひて、只星の光と波の音とに、この世の心地せられ、あるは、一天にはかにかき曇りて、鳴る神はためき、夕立さへふりしきり、いとわびしき夕も、渚漕ぐ漁人の習として、只神佛を念じ、運を天にまかすのみなり。昔より我が國は、浦安國とたゝへ來れど、そはおしなべての稱にて、海人の身には、なか〳〵に浦安き心も、あらざるべし。さるを、我れ等は、日々暖かに着て、かの海人のあされる魚を、食膳の料とし、疊の上に遊び戲れ、肌は日にさらさじ、頭は雨にふれじ、と、手足さへあらはすこと稀なるを、おもふにも、海人の身は、いかに心細く世を渡るらむ、と、思ひつゞけられて、いと悲しうなむ。されど、この大御代となりては、海人の子までも、程々に御惠みの露にかゝりて、世のさま、人の道など、學び知るに至りしかど、さるあさましきすぎはひも、いと樂しくて、海人のたく繩くりかへし、君が八千代をうたはざらめや。

人　羽後國西毛内町　飯塚むつ子

袖のかわく間もなく、みるめをかり、袂をしぼる隙だになく、汐をくみつゝ、辛き世を渡るは、海人なりけり。されど、空のいとよく晴れたるに、磯の松か枝より、うら〳〵と、煙りたなびかせつゝ、藻鹽やくも、おかしく、又おしなべて、霞み渡れる海原に、小船をうかべつゝ、釣竿を垂れたる、いかに心ゆく業ならん。況して、月あかき夕、浪もしづかにきら

めきつゝ、見渡す限り、いとをかしきに、獲物をさはに携へて、やをら、擢を取りつゝ、磯邊の小屋をさして、歸り來るさまなど、いと〳〵たのしげなりや。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

しかのあまはめかりしほやきいとまなみと、昔人の詠たりしかしひがたより、海原をほくみわたせば、小舟はうらにこきつられて、つりするあり、網ひくあり、からき手わざに終日うみくらせるものから、世わたるたつきもさまざまなるべし。あなあはれに、あなくるしくみゆれども、今の大御代は、政員に心なくだく人のみ多ければ、今日よりも明日、今年は昨年にまして、ものみなすすみゆくことのはやければ、海人の手わざのからき世わたりも、いよいよ改まりゆきなんものぞと、心だのしくながめやられて、なみなみならぬおもしろきながめになんありける。

塙いさむ子

日ねもす、夜もすがら、山なす高く、寄せてはかへるしき浪の、磯邊に住まひて、ひたぶるにあさりを生業とし、底ひもしらぬ、廣く青める海面に、日毎に船うけて、八十島かけつゝ漕ぎ出つるものから、一度あやまれば、底のみづくとなりぬるも心にかけず、馴れてうきめを己が業と刈り、釣りの糸の心細くも、一筋に命をつなぐ海人こそ、いとも世にあはれにつれなきものなれ、されど、朝な〳〵東の海よりうら〳〵とさし昇る朝日子の影を眺め、磯馴松のをかしく起伏したるに、汐風のおとなふを、天つ少女のつま琴を調ぶるかと聞き、巖うつ浪の白玉と砕くるを、翼にかけて群れ遊ぶ千鳥を、心のどけく友として、浪風のいたく荒るゝを暇はて、小櫛をとりて見る其心の、いと安らかにゆたけきは、海人にまさるべきかは、あはれうき世の海を渡る國船も、八重の汐路遠ければ、高浪荒るゝ、時もはやて逆捲く時もありなまし。いざや、國人よ、海人子の業に倣はずば、早手逆浪しのぎ得て、思ふ湊にいかで着くべき。

佐藤喜代子

見渡せば、沖つ白浪の、花いとうつくしう咲きて、はてしもなき青海原を、朝夕に目なれつゝ、濱の眞砂の數々に集まる魚を友となし、岸邊に生ふる藻塩草をしとねとし、ひがしの空に朝日子のいまだかすまぬ其内に、とく〳〵起き出でゝ、心地よげにもいさましく、八十島かけてゆく舟の、八重のなみぢをものゝ數とも爲さず、逆捲く浪をけ破りて、そこひもしれぬ海原に、洋々と漕ぎ出でゝ、心に思ふ樣々の、大きやかなる、また小さき、こま〳〵の魚を、生けるがまゝに漁りて、つれ〳〵のなりはひとなして、日を送る、いと〳〵おもしろく、又樂しきわざにこそあめれ。

佐々さし子

青海原に、眞帆片帆、かけて、ひねもす、いさりする海人のこゝろやいかならん、百八十島の、ねぐらを離れやらぬに、起き出はゝ、そこひも知られぬ、海原にいさりして、いくその難を凌ぎつゝ、あまたの魚を、積みて歸りくるも、うれしげなり、されば、一時千金の、利を得て、妻子を、やしなふたつきとすることなりはひなれ、或時は、波高く、空かきくもりて、おそろしげな

るに、海の邊に立ちならび、わが夫いかに、うゑやせじか、もしや命をすつることなきか、船は破れはせじかと、泣きつさけびつ、なげくなり。かくおそろしき目に遇ふはつらけれど、むかしより、此業にたつさはりつゝきつれば、今更に、やむることの、なか〳〵にせぬなり。あるは、舟をも、みぢんに打碎き、身を海原のもくづと、きゆることありて、妻子なげき、やるせなきも、子あるものは、生ひ立ちなば、又も海人となりてんと、思ふも、各々なりはひを立つるか故に、かゝるなんぎを願りみずつとむるになん。

佐久間　八重子

小舟に櫓一つ二つをよそひ付け、小網小竿を打ちそへて、終日海原に浮び、水を潜り、心ぼそくも世を渡るたつきとなすものあり。これなん、みるめ作しき海人の天地なりける。鴎の聲を聞きて、妾をはなれ、一箪の食をかつぎ、早や纜をときて、水をこよなき友となし、遠く漂ひ出でゝ、磯邊をあちらこちらと打めぐり、霞たなびく四方の山々、緑の松の千々の島々を、いつも、かはらぬ眺めにて、たけにもあまる黑髮を、結びもあへず鹽たれて、玉を欺く顔も、見るべき人もあら浪や、千尋の海を浮き沈み、鹽やき衣身にまとひ、浪のひゞきや、松の風、調をかしく欸乃を唱ふるも、聲はすみゆきてだれはゞからぬ塵の外、浮世のことはしら浪や、身を汚すべきものもなく、日每〳〵、只水を友とし、つゆいとひなき海人が身は、實に、鉄石も及ばざらむ。されば、なか〳〵に、浮世の夢の榮花より、いさいみじくまさりけるにや、あらんずらむ、古の聖も、知者は水を樂むといひおければ、みるめかる海人が身も、亦これ知者の類にこそあるらめ。

四豔子

八重の汐風に梢を鳴らす、磯なれ松の木の下蔭を、身に腰簑とやんをまとひ、汐汲桶を輕げに荷ひて、浪打ちぎはを、往來せるかぞ、なべて世に有りふれたる、海人の繪になんある、されど、そは唯、畫工の、ものゝ美を寫せるに過ぎず、あはれ汐汲むのみが、海人の業ならんや。世に恐しく苦しき事こそいと多かめれ。藻鹽燒くいぶせさはあれど、別きて苦しきは、水かつぐ業なる可し。底ひ知られぬわたつ海の、浪をくゞりて、昆布、和布、貝の類などあさり求めて、腰にまとへる籠に、滿つれば浮び出で、又水底にくゞり入りてはあさり求め、つく息の續くかぎり、かくしつゝ、終日浮きつ沈みつして、海ならぬ世を渡り行く其苦しみ、そも如何ばかりなゝん。あはれ、市にひさげる、貝の一つ、昆布の一節だに、容易くは得られぬものを、價廉なればとて、いかでおろそかに ふべしやは。

小川　愛子

木の葉なす船に、故鄕の夢を乘せて、支那朝鮮の海は更なり、しべりやの磯きはまで、遊あさりして、こゝたくの海の幸を、つみかへる海士の雄々しさよ。船といへば、乘らぬさきより、顔靑ざむる人さへあるに、一重の板の底は、常世の堺にて、人喰ふわにに、血を吸ふ鰐さへ、うかゞひ居らんに、まして風さへ吹きあれて、波さはぐ折などは、いかに。すべて、海士といへば、目に一文字もしらず、心に法の燈火もさず、たゞ罪深きものゝ樣に、いひなしゝは、昔の事なりけりな。あまれく敎を受けては、五島の鯨舟、ねぞのひろめかりのわざも、日に進み、月にあらたまり行く事のうれし

さよ。げに、大君の、かぎりなきみ寶のみ庫は、海にこそありけれ其の海を己が家ともし、おのが國ともするは、海士なりけり。そが中にも、館と　事は、女の務とかや。船きらひの吾がどちもしか丶るわざすべきと　りなば　いかにかはせん。かの浦島の子も、今に大　みに、生れたらんには、いみじう、世にもてはやされたりけんに、唯昔語を、をさなごが口の上にのみ、殘すも、口惜しや行平の爾に、波のぬれ衣かけし、須磨の海士もまことなりやいなや。

久間春子

世を渡る業のさまざまなる事は、今更いはんもなかくなれど、彼の海底に入りて鮑とるといふ、海人の業ばかり、いみじうあはれにうれたきはあらじと、おもほゆいとちひさき舟に、夫婦うち乘り、いまだ乳房離れぬ幼子など持たるは、そも連れて漕ぎ出づるが、こ丶とおぼしき處に到れば、夫は小舟に殘り、婦は其幼き子をあつけ置きて、底ひも知らぬ海に飛び入り、鮑求むとよ　何知らぬ幼子が乳尋ねて、よ丶と泣き出す聲もあれば、其の聲海底にひゞきて、ね堪へずとて、婦はやがて浮び出て、小舟にもどり、濡れたるま丶、息もつき敢へず、乳をあたへ、泣やめば、また、もとの海底に飛び入るとか、何とやらんいふ書籍の上にて見たりき。たまたまの舟遊びにさへ、一重の板の下は、千尋の海と思へば、いひ知らず恐きに、たのがすぎはひとはいひながら、其の身みづから飛び入りたらん時の心、いかにうれたく悲しく思ふらん。そを思へば、我身等、家に有りては、父母の膝の下にかしづかれ、學校に物しては、よき師につき、よき友と交らひ、照りはた丶く　の日、ふゞきいみじき冬の夜にも、其の折々のかまへなどしては、寒さもしのぎ暑さも知らで月日を過す事のおふけなさよ。かくても、何事とて、一つゆるつけたる事もなしや、昔男挾磯といふ海人は、やんごとなき仰せごとを畏みて、千尋の底に入り、うるはしく光れる玉をたて來り、其の身ははかなくなりても、名は後の世までもあらはれて、玉にもまさる光をとゞめきとぞ。世にあはれにうれたき海人のしわざさへかゝるに、身のほどほどの教育うけたるもの丶、いかでかは、只にのみ、世をすぐしはつべき。そのこのわざには、なほいみじき事もあめれど、をみなは、女の上のみ　思ひやられてなん。

須磨純子

難波の浦の八重霞も、一重は、なれがしわざならんと、めではやされ、沖にたくなる篝火も、更くる夜の星か、河邊の螢か、とみやびをの苔の葉にうたはれしなど、思へばゆかし。さて住める家やいかにとみれば、松かげなどに、いとはかなう結びて、荒き浪打ち寄せなばやがて、流れもすべきさまのあはれさ、齒などにかきたらむはいとなつかしからむ。まして、花も紅葉もなかりけり、など、思ひ出でられては、住みても見まほしき心地のせらる丶よ、浪荒き冬の日は、漁にも出でかれて、幾日も籠らひてのみ居たるに、からうじて、今日は、にはよくなりたれば、と勇み立ちて、沖遠く漕ぎ出でたるに、遽かに風吹き、浪いと荒く、なりたりとて、急ぎ歸らんとすれど、今は思ふま丶には船も動かず、兎角するうち、いよいよいみじうなりもてゆきて、い手足とも恃める櫓櫂も折れて、今は早せんすべなく、只浪のまにまに流れ行くのみ、さてあるほどに、救の船來あひなどし、又は島などに漂ひ付きたらんにはよけれど、運つたなくして、船砕け、終に底の藻くづとな　も、又　からずと　。

げに世の中の生活の業は數多あれど、海士の業ばかり、かしこき業こそなけれ。さはいへ、賤業にうつらんとも思はざるは、祖先の業を改めずと、いふ數を守れるにか。

岡田友子

やんごとなき人の、世をすてて、あしのまろやなどを、濱邊に、かりふくは、飽かぬ樂のあればなりけり。てけうらゝかに、入江のはてに、淡うたなひけるが、雲か山かの見渡しに、こぎ行く舟もほのかに消ぬ、あるは、白き鷗の、三つ四つ、波にたゞよひ、空にも、あまた飛びちがひたる有樣、畫だくみも、筆をなげつべし。されど、その海原に、かづく海人こそは、世に經る業もさまざまある中、いともいともあはれに、苦しきものなれ。朝には、玉藻かるとて、潮たれ衣かわくひまなく、夕には、藻しほやくとて、くゆる煙にむせびつゝ、いふせき家に、かゝるすぎはひする事を、都の人などは、露程も知らじな。又伊勢の海にて、鮑をとるを聞くに、乎などゐて行き、夫は舟にありて、櫓をとり、婦は海底に飛び入りて、そこはかとなく、貝を求むる中に、子の泣く聲の聞ゆる時は、鮑一つ得てしがなと思へども、浮び上りて、舟はたに取りつき、大息つきて、乳房を含まする樣の、實にあはれなりとかや。世の、樂みにふけり、奢にすさめる人々、これを見ば、あはれ如何なる心をか起すらむ。

池田みさを子

世にはかなきもの多かる中にも、海人の身にこしたるはあらじとぞ思ふ。夜、晝、のけぢめなく、木の葉の如き小舟に、身をまかせ、八重の汐路をたどりつゝ、あらしふく日も、激浪さかまく夜も、はてしも知られぬ海中に、只一もとの櫓を命とたのみ、ぬばたまの、暗き夜半にも、一點の火影をしるべに、夜一夜いさりする心の中、推し測るだにいともの凄まじ。浦の苫屋には、父、夫の恙なき歸りを、わだづみの神に祈りつゝ、待てる妻子の如何に侘びしき事ならむ。斯くて、幾年月を、明し暮すも、心の的のあればならん。漸く歸りつき、隔りなき笑顏を見ては、かたみに喜ぶむつごとに、心の疲れも、藻しほ焚く煙のけぶりとたち消ぬなむ。あはれ其的。

増田丹眞子

玉藻かり、鹽くむなど、文にあやなし、歌によみいでたらむには、最にやさしく、おもしろき業のやうにはあれど、思へば〳〵、此業ばかり、ゆゝしく恐ろしきはあらじかし。さるは、めかり鹽やくいとまなみ、つげの小ぐしもとりあへず、髪は蓬と亂れなして、色つやもなく身にはあらたへの衣きて、すあしにて、網ひくさまさへ、たゞ人の思ひかくべき業ならぬか。さるべき男にてさへ、沖つ波たちさわぐ海の面を、はかなき小舟にのりて、釣りしありくなどは、めくるゝ業なるを、まして、かよわきをとめの、かつきいろ業こそ。いと〳〵危くおそろしく、其心の程さへ、剛くすさまじきものゝやうにはあれど、こも、御國の水産の業にいそしむ、御代のみたからなるをや。ことに、君の爲め、夫のためよく人たる道をつくして、深く底の藻屑ときえたる少々答少女、かつは、壽永のむかし、壇の浦に沈みましたる、かの大御たからを、ひろひ上げ奉りたる、もこれ のむれの人々と思へば、一しほたふとくおもはるゝになん。

賀屋壽子

世にいきとし活ける人々は、生計を營まむが爲に、各職業にいそし

めり。其たぐひいと多く、數ふるに遑あらず、又一つとして、たやすく、安らかなる事なく、皆ふさはしき勞苦あり、さるが中にも、身を海中に委ね、春夏秋冬いつれの時を、分たず、千ひろの底さへ物とも思はで、眞珠、魚貝、海草などを、あさるをもて、おのが職とせる海人こそ、かへすがへすも、いたはしき限なれ。さはいへども又た、天のあたへし業なれば、違ふるも、中々に、かしこからまし。

岸田はつ子

ながむれば、かぎりもしられぬ青海原に、遠山附の島々、霞のひまより、ほのめるか如く、はるかにみゆるあま小舟は、げに、秋の木の葉の浮べるが如し。渚によする白浪は、やがて花のちるかとおぼえ、なみ立てる老木の松は、青々と常盤の色をしめて、風の聲さへ、のどかなる、浦の苫屋の寂げしき、まことにいひしらずかし。かゝるけしきを、朝夕の友となかめ、明くれば、親子兄弟もろともに、なりはひの業にいそしみつつ、くるれば、一つむしろにまどゐして、今日の幸をよろこぶにや、ゑみかたむくるさま、いとたのしげなり。あはれ身には、つゞれをまとひ、いぶせき小屋に住みたりとも、そが心のすがすがしく、はたすなほなること、いかで、ちまたの塵にけがるる都人の、及ぶべきかは。かゝるきはにこそ、まことの貞婦淑女は、あらはるべけれと、思ふに、めかりしほやくあま少女の、そぞろにうらやましくなりて、一夜の旅ねぞ、わすれかねたりし。

中村こと子

都の人は、けふは花見や、あすは野遊びと、遊び暮す春の日にも、彼のあはびとる海人どもは、みすぎのわざと云ひながら、此樂しき時をだも、明け暮れ汐風に吹きさらされ、鹽やくけぶりにむせびつ、幾

さなく、みなそこふかく沈みて、いきもつきあへずいたつくは、いにつらく、いかにくるしからんと、思ひやれば、雨風のさはりも知らで、靜けきまどに物學ぶ身のさちあるは、これもたらちねのめぐみのつゆなりと、ひとりそでをぬらしぬ。

白井さな子

松風、よる波の音のみ高きあら磯に、いぶせき苫屋をやすけき家居とさだめ、朝にいでゝは夕べに歸り、夕べに出でゝはあしたを待ち、波のをちこちいざりしつ。或はかよわき女の身にして、見るにすごき海原の大波小波かいくゞりて、底の藻をとり、貝をあつめ、はた、さしくる潮をくみあげなどして。しほなれきぬのわびしき時もあらん。はた、くるしき世をわたるあらき波路に、心のさわぎもやせん、春のあした、からろの音ものどかにて、霞がくれにみゆる帆影、夏の夕べ、月影清うして、金波くだくる海面に、いざり火の浮きつ沈みつ、をちこちにみゆる心地、誰かは、あはれに、はたゆうに思はざらん。されば、歌人の口にのりて、あはれなるふしも多かるめり。或は、曉友千鳥の聲にあはれをしり、或は浮世をよそにすみはたる月の影をみて、詠む時もあらん。あはれ、通身綺羅をかざりてほこる貴人もあらいそ波にうたれ、もしほたれつゝわぶる海人も、ひとつ世に、なごさこそはあらめ。されど、靜なる山、蒼々たる海は、海人がにほやかなる天眞の心を養ひて、思はぬ樂もやあらん。

楠花雄子

み山里にすみては、海人のたつきのさまなどは、ゆめにだには見れど、人の語るをきくにさへ、おそろしう思はるゝよ、さむさ身をさく冬のあしたも、海水のにゑんかとうたがはるゝ夏のひるにて、うまず、たゆまず、水のそこをくゞりてはすなどり、いはねをつたひては藻をかる、其くるしみいかばかりぞや、思ひやるだも恐ろしき業になん。

く月さえて、盃ともしけちなど、いとえんなる夜のけはひなり、予なでしことといふ題をとりて、

この君の御園にうつし植ゑしよりめくみの露にうるふなでしこ

これは、恩露にうるほひ侍る子どもの上をいさゝか謝し申す心ざへになん、初夜の比夜餐を給はり、酒肴しな〳〵の御もてなしを謝し申に、さすが伊蒲饌なる事をはいなき事にのみおはせたる、盃のなかぞに、色々の作り花うゑたる洲濱の臺もたせ給ひいさゝかみけしきありて、御杯きこしめして翁にたまはり、養老の上歌をうたはせ給ふ、やがて翁がさかづきめしぬれぞ、かしこまりながら奉りて、千代ませとくりことす満座とり〴〵にうたひのゝしりにきはしきこゑ〴〵山祇もをどり出づべきよるのさまなり、それより御盃、味禪以下に給はり、かつは、おのがしゝ献酬し、肴核さま〴〵にして夜半に及ひぬれぞ、まかりまうしの時、あすはこのわたり跋涉して、飢きたりぬる時、かへりきたりたまひねかし、山家相應の麥飯野蔬汁給ふべきなど約せさせ給ふ。

十三日　味禪以下ともなひて、増井の正宗寺におそふ、此寺は、佐竹某の子を、夢窗國師の弟子として建立せられしとぞ、開山は國師なり、七堂の伽藍いとものふりて、なか〳〵殊勝の靈崛也、住持雷啓和尚に相見をはりて諸堂を順禮す、此寺のうしろに廢寺

あり、是は源の義家朝臣、貞任を追討の時、調伏の法をおこなはれたるよしにて、忿想の阿彌陀佛、ものすごき御面貌にて立たせ給ふ、此ほとりより雨ふり出て、あまよそほひんなくて瑞龍山へまゐる、此山は故中納言殿（御諱頼房）の時に、御親族墳墓の地に定め給ひしとぞ、ふもとに御參詣の御裝束所あり、そのかたはらに、吉江永貞といふ老人すまひし、下司をひきゐて山中の掃除、廟庭の修復をつかさどる、山上に、水戸侯故正三位權中納言源威公墓とあるは、すち則賴房卿の石碑なり、靖定夫人谷氏墓と見ゑたるは賴房卿の妾にして、西山殿の御母君也、哀文夫人藤原氏とあるは故關白信尋公の姫君にして、西山殿の北の御方にてなし〳〵けるとぞ、その外御一族の墳墓にいたる迄、ことごとく儒禮を用ひてはうぶり給へる、螭首龜趺馬鬣封にして石をたゝみ、周垣をかためて甚清淨なるさま、御孝志のほどもいちじるく、かつは都方にて見なれぬものから、いとめづらし、かたはらに明製の墓あり、是は舜水先生（名ハ之瑜、字ハ魯璵）といひて、明朝の大儒なりしか、大清の徵命をうけずして、本朝へのがれきたられしを、西山殿やがて御まねきありて、御師範にあふぎ、かつは書生をつけて、經史、文章をまなばせられたれば、今もその遺弟あまたありて、彰考館にさぶらひ、文字のさた、他方の儒生の及ぶべくもあらずとぞ、彰考館は則ち本朝の史傳を編集し給ふ學館の名也、舜水は天和二年に身まかり

て、此あつま路の苔下にものせられしも不可思議の縁なりかし、麓のかたに西山殿の壽藏あり、その碑面に、梅里先生と大字にゑり、碑陰の銘に、

先生常州水戸産也其伯疾其仲夭先生夙夜陪膝下戰々兢々其爲人也不滯物不著事尊神儒而駁神儒崇佛老而排佛老常喜賓客殆市于門毎有暇讀書不求必解歡不歡歡憂不憂憂月之夕花之朝斟酒適意吟詩放情聲色飲食不好其美第宅器物不要其奇有則隨有而樂胥無則任無而晏如自蚤有志于編史然罕書可徵爰搜爰購求之得之微遴以稗官小說摭實闕疑正閏皇統是非人臣輯成一家之言元祿庚午之冬累乞骸骨致仕初養兄之子爲嗣遂立之以襲封先生之宿志於是足矣既而還鄕即日相攸於瑞龍山先塋之側瘞歷任衣冠魚帶載封載碑自題曰梅里先生墓先生之靈永在於此矣嗚呼骨肉委天命所終之處水則施魚鼈山則飽禽獸何用劉伶之鍤乎其銘曰

月雖隱瑞龍雲　光暫留西山峯　建碑勒銘者誰　源光圀字子龍

予この御文章にふかく感情れこりて、道すがら子翔にかたらく、本朝世上より、公武の家々に達人あまた、文にうとくしてともに遺憾あり、いま西山殿文武の全才のみならず、士をしたしみ民をめぐみ、禮に厚くして奢をしりぞけ、諫をもちひて佞人をとほざけ、古をしたひて今をれてしゝなど、善行のみ聞こゑてよこしまなる御名をつたへず

汝等さいはひに此賢將の營中に屬しぬれど、志をはげみ行をみがきて、忠勤をこたるべからずなどいへど、みなれいのうなづく、それより旌櫻寺にまゐる、是は正宗寺の末寺也、かの義家朝臣、奥州追罰のいにしへ、此地の櫻樹に旌、竿をよせて、しばらく陣せられしより、その櫻名を得て、あまさへ寺號となれるとなん、げにも古木のやうだい、十圍も有りぬべく、枝は數百歩の庭上におはひひろこりつゝ、まことに幾もゝとせの煙霞をおひつらんとぞ覺ゆる、これかれ詩つくり歌よむ中に、予も花の春を思ひやりて、

ものゝふの國の風とや治まれる世にもわすれぬ花のしらはた

なほ、名祠どもをかみにといふ人あれど、雨もをやまず、かつは西山の御約も時うつりなんとて、これよりすぐに歸りまゐる、御まうけきのふよりもこまやかにして、夜に入りぬれど、諸の興、なにくれと御物がたり小夜ふけて、おすは水戸へまかり歸り侍らんと御いとま申に、又ちかき程に寂寞をとぶらひねかしと、愛敬ふかき御ありさまどもいひつくしがたくてなん。

十四日　白坂の休所をいでゝ久昌寺へ參詣す、樓門多寶塔いとつきづきしく、本堂には經王寶殿と扁して、中央に妙典の題目（此内に西山殿御自筆紺紙金泥の二十八品をこめられたりとぞ）ひだり右に釋迦多寶の二尊ならびおはします、本堂のうしろを聚石堂といふ、生法師石をあつめて法華を講

せしかど、石ことく\くかたぶきふして聴聞せしといふ心なるべし、此堂に久昌院日句大姉の位牌を安置せられたり、（すなはち西山殿御母儀靖定夫人の御事なり）それより長廊をへて方丈にいたる、丈のうしろ岩切とほし、洞道あり、五六十間ばかりもやあるらん、その洞道をとほりて左の方に庵室あり、摩訶衍庵といふ、四字の額は、西山殿の御筆とぞ、古雅清奇にして字ごとに八法をそなへ給ふとぞればゆ、此庵より見渡せど、十坊と稱して十字の坊舎あり、さらに谷をへたてゝ三昧堂といへる舊地あり、談所即寮を立て、無數の僧侶をあつめて、法華の講席をまうけらる、此比の能化は、京師妙願寺の前の上人日耀師也、そも\く當寺は、延寶年中に、山をひらき岩をうがちて、かくのごとき大伽藍を建立し、日比御母儀の歸依僧なれど、日忠上人を開山として、かの御菩提をとぶらひ給ふとぞ、これより天神林へははどちかけれど、やがてまうでぬ、華表に金字をもて、七代天神宮とかゝせぬるは、西山殿御筆とぞ、いはゆる七代とは、國常立、國狹槌、豐斟渟、泥土煑、大戸道、面足、伊弉諾の尊なり、翁、諸國を巡禮して、あまねく神社の御正躰を問ひたゞし侍りしが、此七代を一社にあがめたてまつる事をいまだきかず、あはれ、いづれの世、誰の人の尊崇せし御社にや、さて額田村を過ぎて、向山といふ松山の中に、淨鑑院といふ淨土宗の寺あり、これは、故中納言賴房卿の兄君（萬千代殿早世）をはうぶり參らせたる所也、勝地れのづか

ら世塵をはなれ、道場さながら淨域をうつして、專念の勤も益〻すみぬべきさま也、寺はげに西の御空にむかふ山雲にやつづく彌陀の淨土も

なは、道すがらの參詣、さのみはとて例のもらしつ、おつき日かげをさけて、夕すゞみのころ梅戸にかへる。

十五日　西山より御文たまはる、賢將の御筆いともめづらかにれはねて、こゝにうつす、

頃間枉駕被訪草堂得接芝眉清談如高山中併遊風情無之遺憾不爲少老年之良友幸之幸也永期後會而已器天途中無恙否爲申謝如何候也不宜

六月十五日　　　西山隱士

安藤朴翁老

机右

廿二日　爲明をあないにて、那珂川より舟にのりて湊村にあそぶ、磯戸にて、

へだてなくかたるれや子の中川は心にかゝるなみ風もなし

返し、爲明、

君と我なかの川浪そこきよくちとせの影の見ねてうれしき

濱にて天妃權現へ參る、これは波海風波のうれひをもまもり給ふ神にて、もろこしの舟つきにはれはくあがめまつるとかや、それより岩船山願入寺親鸞宗へ參り、また海づらをつたひて、大洗礒前の祉へ參詣す、大奈母知、少比古奈の尊にて、齊衡三年に、此所に祠をたれ給ふよし文徳實録に見えたり、祉のまへにこゝらの岩あり、しら波うちよせてくだけちるさま、卯の花がきの風にひるがへるが如し、夫より磯の濱といふ所迄ゆく〳〵かひつものあさり侍りて、

日の本のはてゝふ國の濱あそびいけるかひをもひろひてしかな

二十五日　白井信胤の亭にて百韵興行ありしに、發句をすゝめられ侍りしかど、

松ならふかけや涼しき千代の宿　一傳

しげりそひぬる庭の若竹　信胤

みしか夜の更行月に端居して　徳平

過し十日は、西山殿御生誕の日なれど、ことし古稀の御壽算を少將殿吉孚君より賀しまゐらせらるゝに

亭々清又秀　松樹玉庭中　壽色千年綠　仰高君子風

ことし十三歳の御幼齢にて、一字の添削をからずつらねさせたまふよし、いともめづ

らかに覺ねてこゝにうつす。

七月四日　肥田政大の亭へまねかれ侍りて、發句

幾秋かかはらぬいろの松の宿

爲明か亭にて新寫の冊子とも見せ侍りし中に、過し天和二年朝鮮人來朝せし時、中納言殿送行の詩あり

送朝鮮國通信正使東山尹趾完歸本國

萬里勞來聘三韓尋舊盟衣冠皆駭矚草木亦知名遽爾已臨別踏綜不盡情鄉人若相問文物屬昇平

送副使鷲湖李彥綱

星軺持使節致好結交隣邂逅言雖異殷勤情倘親寄詩推李杜分袂隔胡秦今日君歸去長爲遠別人

送從事官竹菴朴慶後

雞林交際久銜命使扶桑盛禮復難得良緣不可常綠陰辭舊里黃菊感他鄉殘夢屋梁月相思幾斷腸

正使尹趾完が和韵に未入扶桑界先聞水戶名。といふ句あり、御賢德、はやく異域までも

きこゆものするもいとめづらしく、しかしながら我朝の盛事ならずや。
いつしか八月にもなりぬ、歸りこん秋をちぎりてと云ひしごとく、もはや此頃は歸りのぼり侍らんと思ひ催したるに、これかれやんことなき抑留ども、さすがにいなびかたくて、來春まで逗留すべきになりぬ。
三五夜中の月、例の年よりはこよなくすみまさりたるに、二千里外のふるさとをおもひやりて、

ふるさとは幾重千さとの海山もへたてぬ月にゆく心かな

また、發句ひとつ

うかれきて月に宿かる今宵かな

九月十二日　日光山は年ごろ參詣願ひふかゝりしに、さいはひ水戸よりわづかに三日の旅なれど、れもひれこしてけふしもかといてす、常葉、大部、鳴澤などいふ村々をへて、入野の里に小松寺(眞言宗)といふは、むかし小松の大臣重盛公の良從筑後守貞能、かの大臣かくれたまひてのち、夫妻ともに出家して追善の爲に造立し侍るとかや、すなはち大臣の位牌を安置して、今の世までも不斷の勤修を廻向すとぞ、かのもろこし育王山の法事はかぎりあれど、すたれたる事もやあるらんに、まのあたり此國にてとふらひ

まゐらするを、過去聖靈もさぞうれしくみそなはすらんに、しむらく法施まゐらせて

たゆやらぬみのりも千代の小松寺ふりにし跡をとふ手向かな

古内村の清音寺は、中峰國師の法嗣復菴和尚の開基とぞ、松ふり雲しづかにして殊勝の禪林なり、なほ里々を過て、鑓子といふ村につきて岩屋の觀音ををかむ、寺號は佛國寺（眞言宗）ばさつ安座の岩屋へ、こなたより廊橋をかけてわたる、橋の下は深谷幾むく丈かあるらん、もろこし天臺山の石橋もかうやあらましと思ひ出でらるゝさまなり、此比の雨に道いとあしく、からうしてもてぎといふ宿に着きぬ。

十三日　もて木を出て、塙（ハナハ）うたがひ、道成宿など過て絹川をわたり、ゆく〳〵茫々たる野はら、時しも秋の淺茅色つきて尾花、野菊など咲みたれ、萬の葉の風にみだるゝは、たれをうらみてなどとふ人もなし、是すなはち那須野にして、雀が原、小金原などといふにつゞきて四十里余の廣野なりとぞ、殺生石の舊跡へは六七里程ありといふ、奈須與一の城山といふもはのかに見ゆめり、此野に、高茅雄鹿などを、ふるくもよみたるやうにればね侍れど、

秋ふかきなすのか原の高茅に妻やこもれるをしかなくなり

宇都宮は近國交易の所なれど、市町のあきものいとにきはゝしく富商の家々軒をその

つらねたり、けふは此宿にやどりて明神へ參詣す、神境ひろ〳〵として蜿々たる大社也、僧もこよひは名にしれふ後の明月いとくまなく晴たり、思ひもかけぬとつ國の月を見るもうれしきものゝ、又ふる里の空ゆかしくて一かたならず、罪なくて配所の月といふもかうやうの身にや相應すべしなど驛のあるじにたはぶれつゝ酒のみ辛くひて月を弄ぶ、

れもひとけは何かこゝろにうつのみやくもりなき夜の月をなかめて

十四日　うつの宮を出て、とくぢら、かねま、大澤などいふ里々を過て、室の八島はいづこの程にやととふに、それは壬生といふ所に侍りて七八里はどもへたゝれりと語れど、行て見る事あたはず、

遠かたや一むらふかき秋きりはむろのやしまの夕けふりかも

と、詠めやりてすぎぬ、今市をこねて鉢石につきぬ、本月坊にあないしてやどりをもとむ、宮めぐりは明日心しづかにとて、こよひは住僧に御山のものかたりども聞きて夜ふけ侍りし。

十五日　沐浴して御宮めぐりす、稲荷川に幕府御參詣の御橋あり、橋板高欄なども朱をもていろどれり、前後にやらひ門ありて、常人はこゝを通らず、別に假橋をかけて渡

りかよふ、此御橋を山菅の橋といひて古歌にもよみたり、御橋近き所に深沙大那の社あり、此神の修法眞言家に傳はれりといへども、勧請したる寺まれなれど、いとめづらしくをがみ侍りぬ。それより行きて左の方に幕府の御旅館、みぎの方に日門主の御寺あり、さて、華表、唐門、神馬所、御手水所、拜殿、歌仙の間よりはじめ、東照權現の御宮いとつぎ〳〵しく、仙人、唐人、花木鳥獸のほりものの金銀をのべ、珠玉をみがきたる莊嚴めもかゝはゆく心もそらにて、言葉にも筆にもつくすべきかたなし、げにも御當家の御祖神なれど、天か下のちからをつくすのみにあらず、もろこしの材木をさへもちひさせ給へど、寸木寸金の結構は、御本地藥師如來の淨瑠璃世界をこゝにうつしたまふにやといとたふとく、かたはらにうづくまりて、心經數十篇を誦して法味にさゝげ、例のこしをれを吟して法樂にそなふ、

天か下くもりなければ東より照す日かげをたれかあふがん

それより經藏、三佛堂（彌陀釋迦藥師如來）大猷院君御佛殿、賴朝堂などを巡禮し、日光權現の御社に參りて、さらに瀧の尾權現を拜す、是を六本杉とも號して御社もなく大杉のしげれる中に石を安置して神躰とす、こゝに坊舍ありて別所となづく、日ごろ聞き及びたる食責の器を掛けならべたり、それより新宮權現へまゐる、こゝにも別所ありて食責の

奠都三十年祝賀會々員募集廣告

謹みて惟るに
今上天皇陛下英明の資を以て夙に大統を繼紹し復古の偉業を肇め維新の宏猷を全くし給ひ明治元年江戸を改めて東京と稱し尋で車駕東臨し其翌二年を以て永く大鼎を奠め給ふ是れよりして城市衢整人口輻輳文物粲然として觀るべく商工諸業日に興り月に盛なり之を内にしては皇澤四海に洽く之を外にしては國威萬邦に宣ぶ洵に振古未だ曾て有らざるの隆運たり嗚呼偉なる乎嗚呼壯なる哉茲に奠都三十年の一大紀念期に遭遇し恭しく祝場を設け天神地祇を祭り上は以て聖德の無量を頌し奉り下は以て帝都の不朽を祝するは吾等府民の微衷寔に已むべからざる者あるなり顧ふに奠都紀念祭は國家の鴻典たり吾等府民幸に輦轂の下に享く日夜親く皇化を被るを以て此鴻典を經營企畫するを得其榮や亦大なりと謂ふべし府下百萬の生靈心を同くし力を戮せ以て此擧を成就し雍熙の澤に謳歌し休明の世を鼓吹し國運をして益隆昌ならしむるは亦豈臣子報國の義にあらずと謂はんや茲に發企の趣意を陳して同志諸君に告ぐ

會長　子爵岡部長職　副會長　澁澤榮一

委員

大倉喜八郎　松岡辨　原六郎　今村清之助　米倉一平
大江卓　高田愼藏　喜谷市郎右衛門　近藤廉平　雨宮敬次郎
佐久間貞一　中野武營　芳野世經　梅浦精一　横山孫一郎
松田秀雄　田中平八　岩谷松平　加東德三　二橋元長
豐川良平　岡田來吉　岩出惣兵衛　中澤彥吉　相澤喜兵衛
土田政次郎　岡本善七　淺田正文　朝吹英二　山本達雄
上田安三郎　清水滿之助　池田謙三　野中萬助　伊藤幹一
森村市左衛門　小野金六　渡邊治右衛門　安田善次郎　馬越恭平
山中隣之助　萩原源太郎　大橋佐平　毎日新聞社　都新聞社
國民新聞社　東京新聞社　日本新聞社　東京教育社　帝國通信社

規要程領

○一本會は府民の有志合同して奠都三十年を祝祭するを以て目的とす○一祝祭は來四月十日上野公園に於て擧行す○一會員を左の二種とす

●通常會員　金二圓以上を寄附する者

●特別會員　金十圓以上を寄附する者

○一會員たらんとするものは其金額を定め來る三十日迄に當事務所へ御申込ありたし○一特別會員及出金額は新聞紙上に廣告すべし○一團体にして會員たらんとするものは其代表人を定め御申込ありたし○一會員は式典に參列し且相當の待遇を受くることを得

前項の趣意及規程要領に基き廣く會員を募集するに付同感の有志諸君奮て御贊成あらんことを企望す

明治三十一年三月

京橋區日吉町十五番地九州倶樂部内

奠都三十年祝賀會事務所

伯爵佐野常民君題字　子爵松平乘承君序文
子爵品川彌二郎君題字　華族女學校幹事淺岡一君序文

藤井玄溟著

明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩 完

瓜生岩女肖像入

定價金貳拾錢郵稅四錢　郵劵代用一割增

我邦古來堅操烈節を以て其名傳はりし婦人鮮からす然れとも未た世道の爲め鄉國の爲め其身を犧牲に供せしもの有るを聞かす思はさりき聖代に方り福島縣下に稀有の女傑出てんと天下の人刮目以て一番斯の編を見よ其の畢生の七十年間爲す所仁ならさるなし言ふ所慈ならさるなし是を以て暴漢至れは暴漢屈し嬰兒慕ひ嫗翁服し上は能く九重の叡感を忝うするに至る是れ畢竟至誠内に充ち德風外に溢るゝに非すんは誰か斯の如くならん嗚呼道義地を拂ひ利慾交々競ふ今の時一たひ之を繙かは必すや懦心振ふへし私心掃ふへし多涙多血の志士淑女何そ其偉蹟を尋ね以て斯の女傑に接せさる

發行所　東京々橋區築地二丁目廿一番地　日本赤十字發行所

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及當區にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別證若郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢
十二冊前金(半年分)	壹圓
全國無遞送料	

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十一年三月十八日印刷
同　年三月二十日發行

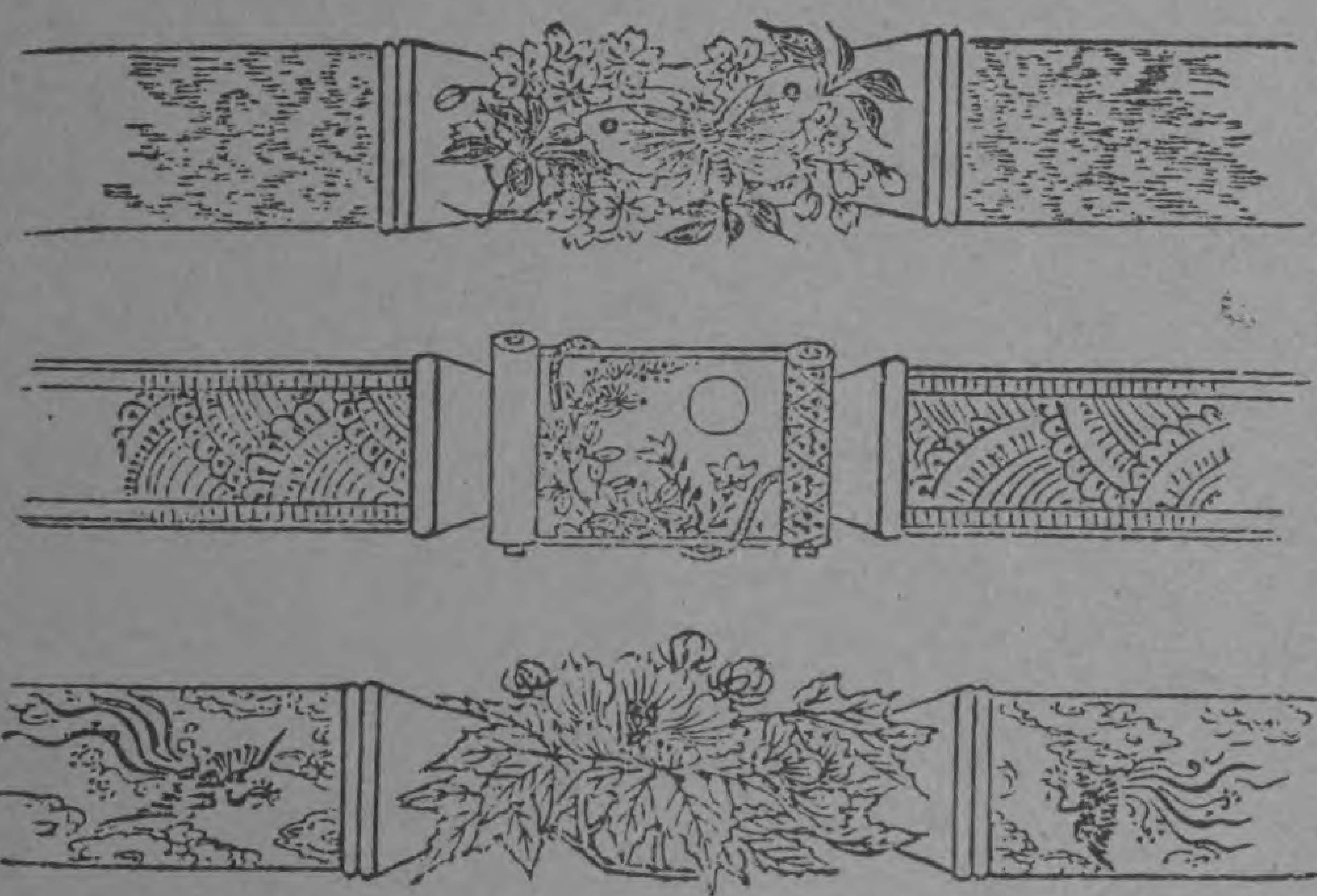
東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木艮雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
(電話番號本局八八)
發行所　國光社

貴婦人用帶締

◉野口小蘋女史考案並畫



甲價百二十圓
丁價七十圓
庚價四十圓
癸價十五圓

乙價一百圓
戊價六十五圓
辛價三十圓

丙價八十五圓
己價五十圓
壬價二十圓

◉金、白金、赤銅朧銀等の金屬を用ひて彫刻を施せしもの

甲價六拾圓
乙價五拾圓
丙價四拾五圓
丁價四拾圓
戊價參拾七圓
己價參拾三圓
庚價參拾壹圓
辛價貳拾九圓
壬價貳拾七圓
癸價貳拾五圓

◉金又はプラチナ地にダイヤモンド、エメラルド、ルユビー、サフアヤ眞珠等の寶石類を裝嵌したるもの

右の金ものは何れも名工の手に成り紐は織物或は種々の新形又は古代の組方に倣ひたる絹打にて其製作都て壯麗にして優美なり尤も彫刻の疎密わるひは寶石の大小に依りて代價にも高下われは冀くは車を枉げて弊堂に臨み其現品を御覽じ玉ひ但し遠隔の地なれば郵便にて御注文を下し玉へ代金御送附次第その價に相當の品を精撰して調進し參らせ聊にても御信用に背く事は候はず若し思召に適はざる時は交換し玉ふとも原價を取戻させ玉ふとも御望の隨意に候ふべし其手續どもは屢々新聞紙に廣告したる弊堂店則に詳なり

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地

時計及寶玉類貴金屬美術品商（電話番號本局三百三十三）天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂小川町出張所

大阪市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七三三）

天賞堂大阪出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戶

天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地

天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛冶屋町十番地

天賞堂熊本出張所

長崎市萬歲町上野屋方

天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方

天賞堂小樽臨時出張所



妙技一等賞牌